

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 15 集

串木第1遺跡

串木第2遺跡

岳惣寺遺跡

1 9 9 1 • 3

宮崎県西都市教育委員会

序

この報告書は、昭和63年度及び平成元年度実施した「串木第1遺跡」と平成元年度に実施した「岳惣寺遺跡Ⅱ」「串木第2遺跡」の発掘調査の報告であります。

調査の結果、串木第1遺跡からは古い寺院関係と考察される遺構等が検出され、また、串木第2遺跡からは縄文時代早期の集石遺構や弥生時代～古墳時代の住居址等の遺構・遺物が検出されました。さらに、岳惣寺遺跡Ⅱからは古代の住居址や中世の土坑等の遺構・遺物が多数検出され、多大な成果を上げることができました。

本書が地域の皆様に幅広く活用され、埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、古代史解明に少しでも役立てば幸いです。

なお、この調査に際しまして、種々ご協力を賜った関係機関をはじめ、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に対し、衷心より厚く御礼を申し上げます。

平成3年3月30日

西都市教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、西都市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 掲載しているのは、串木第1遺跡（2件）・串木第2遺跡・岳惣寺遺跡の計4件である。
3. 各遺跡の調査期間と調査組織は下記のとおりである。

(1) 串木第1遺跡〈1次調査〉

調査期間 昭和63年12月12日～12月15日

調査主体 西都市教育委員会

教育長 篠原利信

社会教育課長 伊藤政実

同文化財係長 黒川忠男

調査員 日高正晴（西都原古墳研究所長）

緒方吉信（嘱託）

蓑方政幾（主事）

調査作業員 土持博厚・河越暉男・河野恵一・園師タツエ・河越公子

(2) 串木第1遺跡〈2次調査〉

調査期間 平成元年10月12日～10月20日

調査主体 西都市教育委員会

教育長 平野平

社会教育課長 清郁男

同文化財係長 黒川忠男

調査員 日高正晴（西都原古墳研究所長）

緒方吉信（嘱託）

蓑方政幾（主事）

調査作業員 篠原時江・黒木トシ子・長友敏子

(3) 岳惣寺遺跡Ⅱ〈2次調査〉

調査期間 平成元年6月20日～8月15日

調査主体 西都市教育委員会

教育長 平野 平

社会教育課長 清 郁男

同文化財係長 黒川 忠男

調査員 日高正晴(西都原古墳研究所長)

緒方吉信(嘱託)

養方政幾(主事)

調査作業員 篠原時江・黒木トシ子・久保田要子・緒方タケ子・緒方ステ子

長谷川クミエ・藤原秋子・岩切雄一

整理作業員 岩切雄一

(4) 串木第2遺跡

調査期間 平成元年10月26日～11月10日

調査主体 西都市教育委員会

教育長 平野 平

社会教育課長 清 郁男

同文化財係長 黒川 忠男

調査員 日高正晴(西都原古墳研究所長)

緒方吉信(嘱託)

養方政幾(主事)

調査作業員 篠原時江・黒木トシ子・長谷川クミエ・藤原秋子

黒川種秋・田中安市・河野達也・新城静夫・沼口誘一

整理作業員 関谷憲子・福田頼子

総 目 次

1. 串木第1遺跡（1次・2次調査）.....	5
2. 串木第2遺跡	23
3. 岳惣寺遺跡Ⅱ（2次調査）.....	49

1. 串木第1遺跡

例　　言

1. 本報告は、市道串木(4)線の拡幅及び排水路整備工事に伴い、昭和63年度及び平成元年度に実施した発掘調査報告である。
2. 発掘調査は西都市長からの依頼を受けて、西都市教育委員会が実施した。
3. 調査は、昭和63年12月12日～12月15日（1次）と平成元年10月12日～10月20日（2次）の2年度に渡って実施した。
4. 本書に使用した図の作成・編集は養方が行った。
5. 本書の執筆は、V.まとめを日高が担当し、その他は養方が担当した。
6. 本書の遺物実測は、養方が行った。
7. 実測図の方位は、磁北である。
8. 出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

本文目次

I. 調査に至る経緯	9
II. 遺跡の位置と歴史的環境	9
III. 調査の概要	10
IV. 造構と遺物	10
V. まとめ	16

挿図目次

第1図 遺跡位置図	8
第2図 発掘調査区域図（1次調査）	11
第3図 第1・第2トレンチ遺構分布図	12
第4図 第2トレンチ配石状遺構実測図	13
第5図 発掘調査区域図（2次調査）	14
第6図 第2トレンチ配石状遺構実測図	15
第7図 出土遺物実測図（2次調査）	18

図版目次

図版1	21
図版2	22



	遺跡名
1001	西都原古墳群
1028	丸山遺跡
1030	伝山路城跡
2001	千畑古墳
2002	茶臼原古墳群
2003	上穂北古墳群
2004	杉尾横穴墓群

	遺跡名
2005	松船横穴墓
2006	千畑横穴墓群
2007	圓横穴墓
2008	上江横穴墓群
2009	大木原横穴墓
2010	大木原古墳
2011	串木横穴墓群

	遺跡名
2012	轟遺跡
2013	上野遺跡
2014	徳北城跡
2015	竹尾寺跡
2016	緑ヶ丘遺跡
2017	千畑遺跡
2018	牧ノ原遺跡

	遺跡名
2019	上ノ原遺跡
2020	大木原遺跡
2021	串木遺跡
2022	山城城跡
2023	平城遺跡
2024	金剛寺遺跡
2025	宝財原遺跡

第1図 遺跡位罫図

I. 調査に至る経緯

西都市街地の北西約4kmに位置している串木地区（穂北）は、一ヶ瀬川左岸台地上に営まれた静謐な地域であるが、近年は誘致企業の搬入製作所等が進出し、近代化が進みつつある地域である。

このような中にあって、串木地区最南端に位置し、周辺地域住民の重要な生活道となっている市道串木4線は、狭小のため、通勤や通学等における交通安全も図れない状態であり、拡幅事業については地域住民の要望も提出されていた路線である。

このようなことから、昭和63年4月、西都市建設課より同路線の拡幅及び排水路整備事業計画について相談があった。しかし、同路線を含めた地域は周知の埋蔵文化財包蔵地（串木遺跡）であることから、市建設課と埋蔵文化財の保護について協議を重ねた。

協議の結果、市建設課としては工事計画の変更が困難であるため、事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

発掘調査は西都市教育委員会が主体となり実施したが、本工事が同路線を半分ずつ昭和63年度と平成元年度の2年度に渡っての計画であったことから、調査も昭和63年12月12日～12月15日と平成元年10月12日～10月20日の2回実施した。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

串木遺跡は、西都市街地の北西約4km・九州山地を水源とする一ヶ瀬川左岸台地上に位置している。東側眼下には水田が広がり、一ヶ瀬川の支流・漸江川が南流している。この串木遺跡は、土器・石器等の遺物が多量に散乱しており、また、昭和60年度実施した遺跡詳細分布調査においても多量に弥生時代～古墳時代の遺物が発見され、同時代の大集落群の存在が想定された。

串木第1遺跡は、串木遺跡の南側が一段下がった台地縁辺部に位置している。標高30m、北側とは5mの比高差がある。第1遺跡の東側には穂北神社が存在し、西側には古くは寺があったといい伝えられている地域である。

同遺跡の北側台地及び山間には上穂北古墳群が、また、台地斜面には串木横穴墓と大木原横穴墓が点在している。

また、漸江川を隔てた対岸・茶臼原台地上には舶載の四獸鏡・蛇行劍が出土した前方後円墳の児屋根塚古墳をはじめとする55基の国指定・茶臼原古墳群が点在し、さらに、同台地南側西側斜面には国指定の横穴式石室を有する千畳古墳や千畳・上江・圓・野竹・杉尾等の各横穴墓群が点在している。中でも、圓横穴墓は、昭和41年蜜柑畠造成中に突然開口したもので、中から直刀をはじめ土師器・須恵器・鉄斧・鉄鎌・金環・勾玉・管玉・切子玉等 672点もの遺物が出土しており、通例的に副葬品の少ない横穴墓としては注目される。

これら横穴墓群のうち千畳（9基）・上江（21基）・串木（4基）・堂園（4基）・野竹（8基）・杉尾横穴墓群（2基）については昭和59年度～62年度にかけて確認実測調査を実施し、遺構としては半肉彫りの四本柱を有するもの（千畳横穴墓1号）、遺物としては舶載の方格規矩文鏡（千畳横穴

墓7号)や環頭大刀双龍文柄頭(千畳横穴墓9号)等が出土し、大きな成果をあげることができた。それから、茶臼原と同一台地上の南方には22基の前方後円墳を有する国指定・新田原古墳群を眺望することができる。

さらに、一ツ瀬川を隔てた南側丘陵台地には、男狭穗塚・女狭穗塚の巨大古墳をはじめ311基を有する特別史跡・西都原古墳群がその偉容を誇っている。

III. 調査の概要

調査は拡幅部分についてのみ、樹木等によって調査不可能なところを除いて、すべて調査を実施した。

昭和63年度の調査(1次調査)は、串木第4線の東側200mが対象となつたが、調査可能なところは4ヶ所で、東より順次第1トレンチ～第4トレンチとした。

平成元年度の調査(2次調査)は、同路線の西側800mで、都合上西から第1トレンチ～第5トレンチとした。

本遺跡においては、アカホヤ層は残存しておらず、第IV層の明褐色土を基準として遺構等の確認を行つた。

調査の結果、1次調査では、第3トレンチでは攪乱がはげしく遺構等は検出できなかつたものの、第1トレンチから柱穴及び土坑、第2トレンチから配石状遺構、第3トレンチから土坑及び柱穴を検出することができた。2次調査では、第2トレンチから配石状遺構のみを検出したのみで、その他陶磁器等の遺物がわずかに出土しているのみである。

これら遺構については対象地が限られていること等により不明な点も多いが、2次調査の配石状遺構及び共伴遺物等については、近くに寺があったと言い伝えられていることから、寺関係の遺構の可能性があり、一応の成果をあげることができた。

IV. 遺構と遺物

(1) 遺構

遺構は、全体的に少なく、また、共伴遺物もほとんどなく不明な点も多いが、1次調査の第1トレンチから柱穴3個・土坑1基、第2トレンチから配石状遺構を1基、第3トレンチから柱穴3個、2次調査の第2トレンチから配石状遺構を1基検出した。

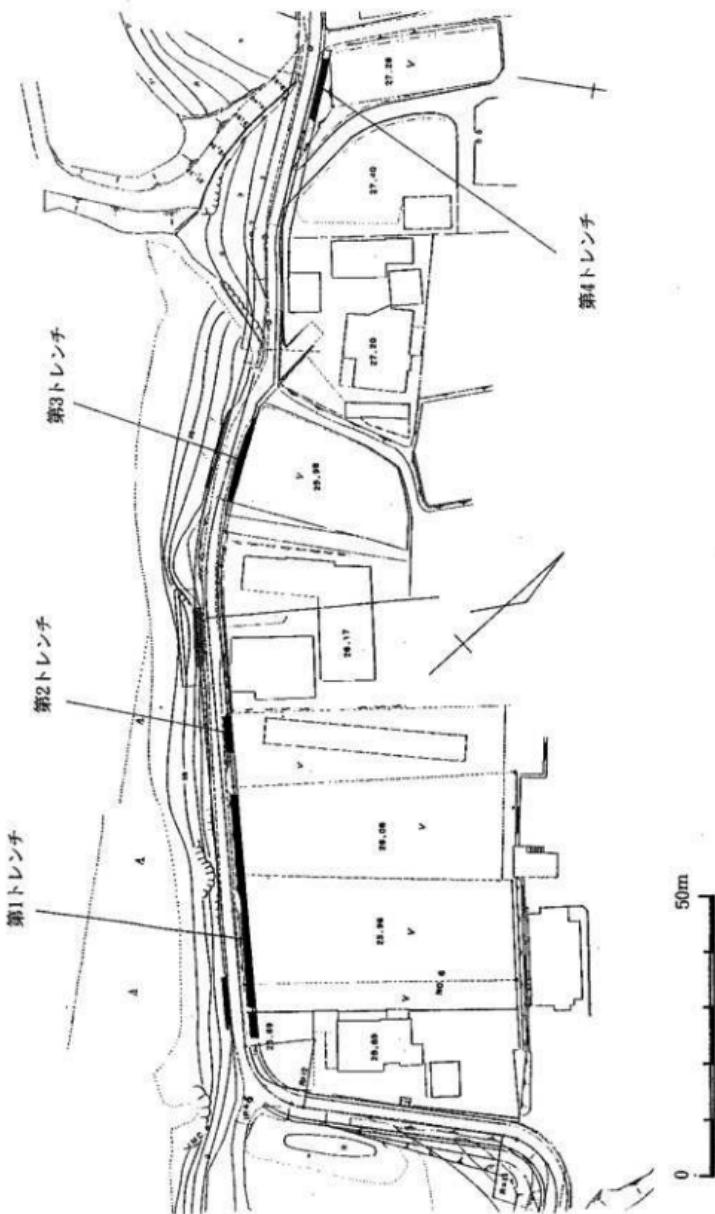
配石状遺構(第4図・第6図)

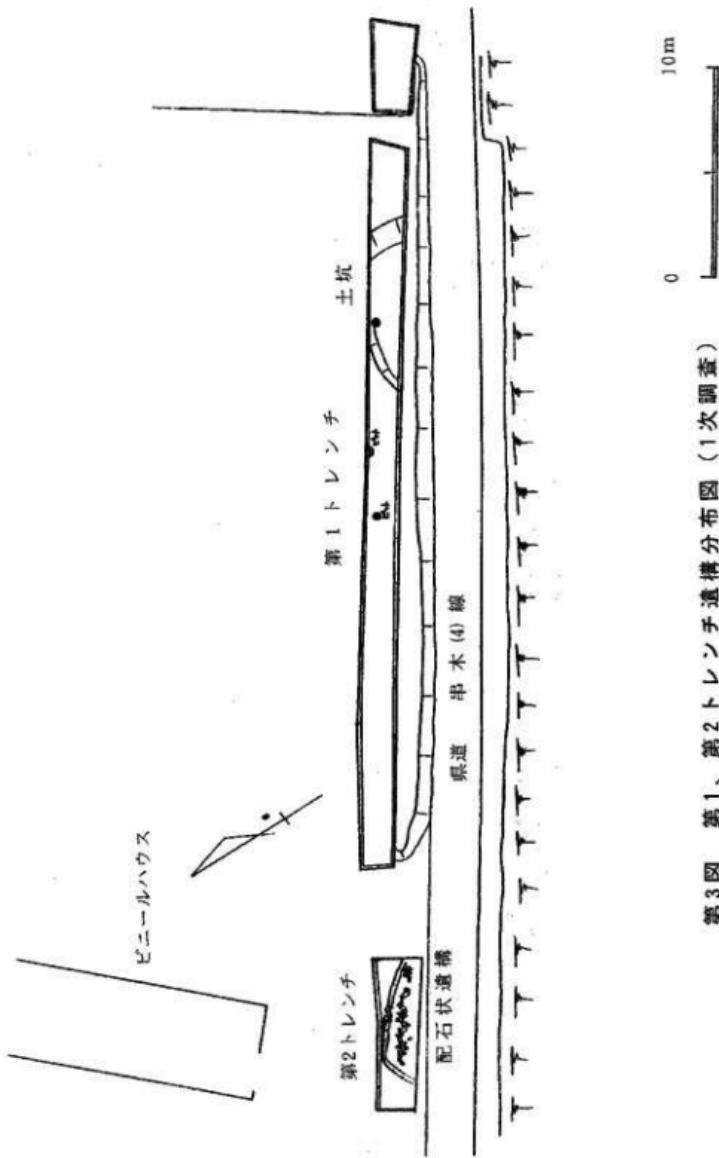
1次調査の配石状遺構(第4図)は、第2トレンチから検出したものであるが、方形あるいは長方形の土坑の中に12～25cmの石を直線的に配している。土坑の壁面の高さは8～14cmを計る。共伴遺物はなく、使用目的及び造築年代等については不明である。

2次調査の配石状遺構(第6図)は、第2トレンチから検出したものであるが、トレンチ全体に、また、西から東に傾斜しながら10～40cmの石を配している。共伴遺物は、青磁・陶器・染付等が出土

発掘調査区域図(1次調査)

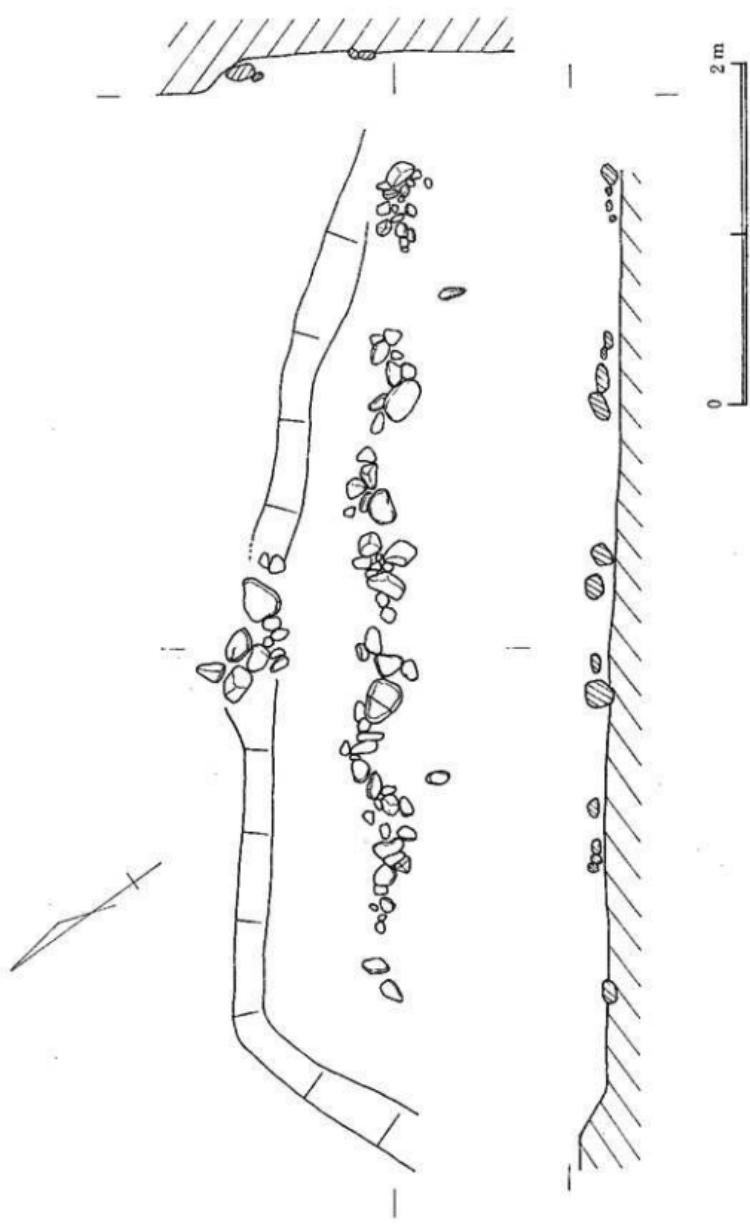
第2圖

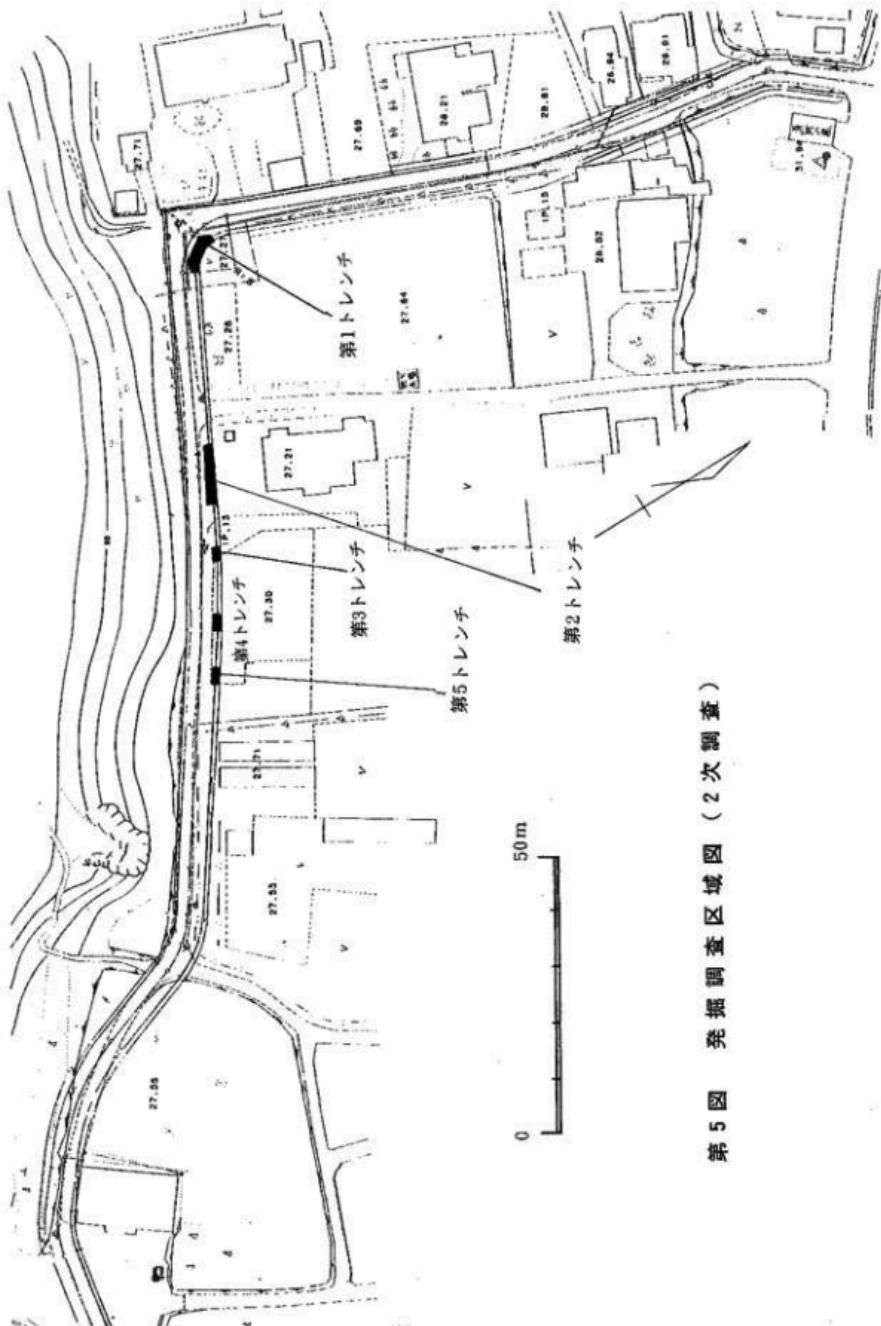




第3図 第1、第2トレンチ遺構分布図（1次調査）

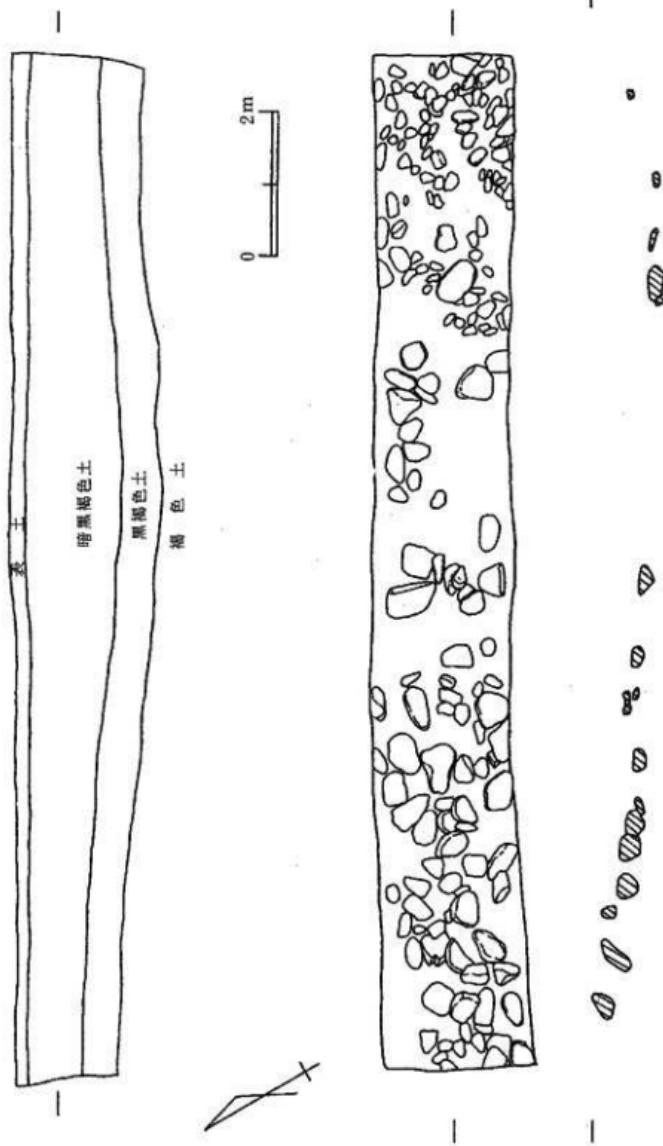
第4図 第2トレンチ配石状遺構実測図





図第5図 発掘調査区域図(2次調査)

第6図 第2トレンチ配石状造構実測図



している。この遺構については、近くに寺があったと言い伝えられていることから、この寺関係の遺構の可能性もある。時代的には共伴遺物等から中世～近世と考察される。

柱穴・土坑（第3図）

柱穴は、1次調査の第1トレンチから3個・第3トレンチから3個の計6個検出している。直徑20～55cm・深さ25～35cmを計り、すべて円形の柱穴である。共伴遺物はなく、時代的なことは不明である。

土坑は、1次調査の第1トレンチから3基・第3トレンチから1基の計2基検出している。第1トレンチの土坑は大型であるが、狭小調査のため、そのほとんどが対象地外であり、規模等については不明である。現存長 8.3m・深さ 0.2mを計る。壁面はゆるやかに傾斜していることから住居址の可能性は薄い。第3トレンチの土坑は、円形プランで、直徑 1.0m深さ 0.5mを計る。いずれも共伴遺物はなく、時代的なこと等は不明である。

(2) 遺物

遺物は、わずかではあるが2次調査のみ出土している。青磁7点・陶器15点・染付7点・剝片1点の計30点で、ほとんど第2トレンチからである。

1・2は青磁碗の口縁部で、器厚は薄い。いずれも小片である。3は高台付青磁鉢の底部で、高台の直徑6cm・高さ 0.8cmを計る。4は磁器碗の口縁部で、器厚は薄く灰オリーブ色を呈している。5は磁器鉢？の底部で、器厚は厚く白色を呈している。6・7は染付碗の口縁部で、いずれも器厚は薄い。6の口唇部は丸く、7の口唇部は尖っている。6は二重の半円を組み合わせて、7は花は施している。8は高台付陶器碗の底部で、高台の直徑5cm・高さ 0.9cmを計る。黒色を呈している。

V. まとめ

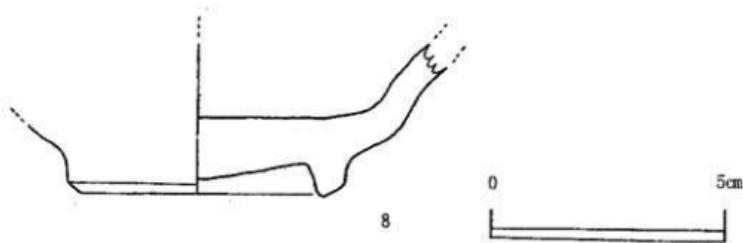
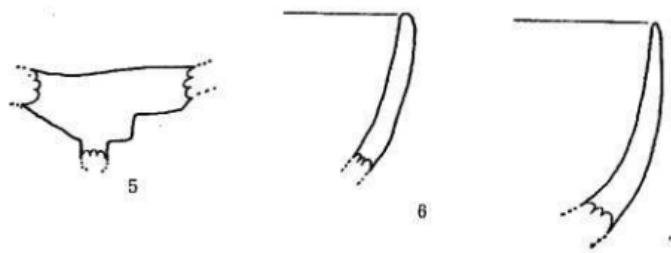
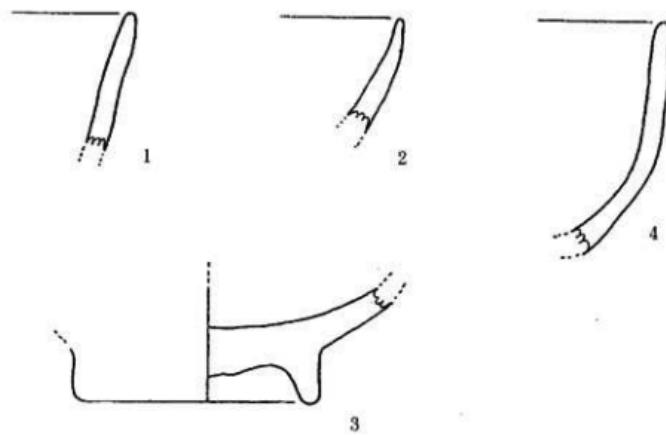
日高 正晴

このたび発掘調査が行われた串木第1遺跡では、總北神社のすぐ裏を通って、一ヶ瀬川沿いに北に走っている道路の北側に、トレンチが入れられた。そしてこの調査は第1次と第2次の2回行われたが、そのうち、主として遺構が確認されたのは、第2次調査の第IIトレンチである。このトレンチでは表上下約70cmの層位に大小砾よりなる配石遺構が発見されたが、この遺構から推察されるところでは、建造物の雨打遺構のようにもみなされる。そして、興味深いのは、この串木第1遺跡発掘調査の中で、この第Iトレンチ内からも、極めて小片であったが、白磁片と青磁片が各1点ずつ検出された。ところで、この第Iトレンチに沿う道越しには、古くから修験者のこもる護摩堂（行者堂）が最近まで建っていたが、その行者堂を再建した現在の御堂の中には、管理者である新名家の伝世品が所蔵されていた。そしてそれらの慈木寺関連所蔵品についての、筆者の調査結果では、この地には、恐らく、中世初期から真言密教系の「慈木寺」という寺院の存在していたことが確認された。その資料の中には、「御祈禱之柱慈木寺」という銘入り木版も見い出された。なお、その他に護摩堂や馬頭観音堂が建立されたことに関する棟札も認められたが、その棟札の墨書きには豊後國日田代官名なども記されていた。それらのことから考察されることとは、この慈木寺が、江戸時代においても、格式をもった寺

院であったことがうかがわれる。そこで想起されるのは、第2次の第Ⅱトレーナーにおける敷石造構は、もしかしたら、この串木寺に関連のある建造物に施された雨打造構かもしれないと思う。現在でも、この第Ⅰトレーナーから第Ⅱトレーナーを入れた地区には民家が建っていないか、里人は、古くから寺院址などには民家を建立しなかったようである。また、第Ⅰおよび第Ⅱトレーナーから出土した青磁、白磁類は、すべて中国明時代に輸入されたものであり、そのような国外からの貴重な磁器類を所有する寺院は、その地域での有力寺院であると思われるが、江戸時代の後半においては、すでに衰えて修験道者を中心とした護摩堂へと変化していたようである。いずれにしても、古代西部地方の一拠点であった總北郷の串木地区にある寺院跡関連の遺跡として、関心をそそられるところであるが、あわせて、不動明王像が伝世されている串木寺跡についても、再確認することができた。なお、行者堂内の所蔵品の中で、修験者に関係のある独鉢鉢や錫杖上部に付ける鉄輪金具などの信仰文化財なども注目されるところである。

註

- ・串木第Ⅰ遺跡発掘調査において、串木寺跡の関連調査の必要から、本年、4月6日、所有者、新名史明氏のご協力により、行者堂内所蔵品の調査をさせて頂いた。



第7図 出土遺物実測図（2次調査）

図 版



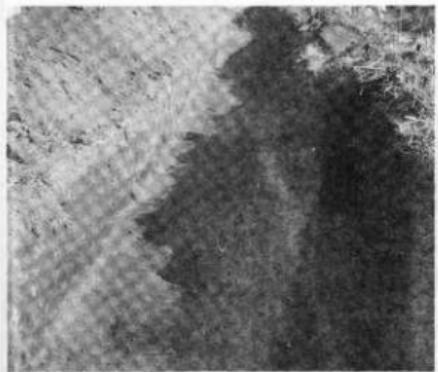
劍
劍

圖

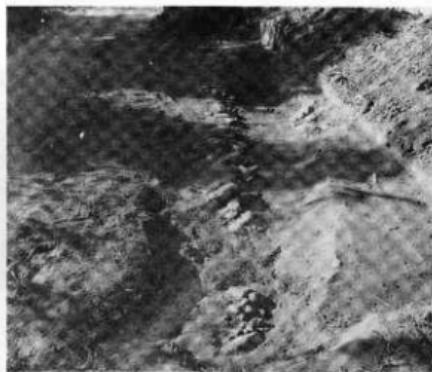


圖 7-1 西漢長沙漢王之子劉建之

図版 1



第1 トレンチ遺構検出状況（1次）



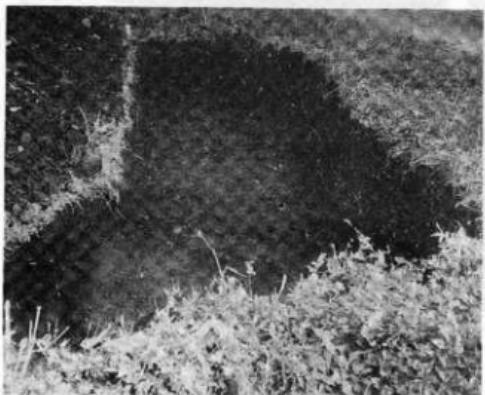
配石状遺構検出状況（1次）



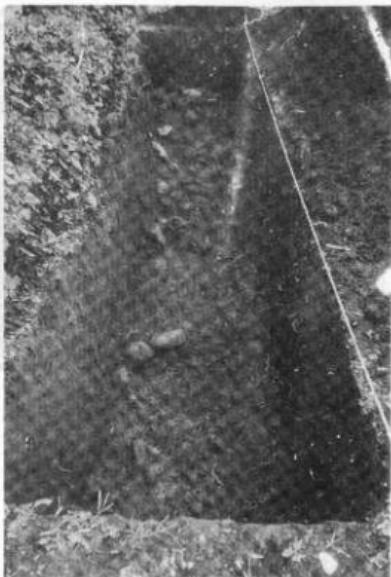
配石状遺構近景（1次）



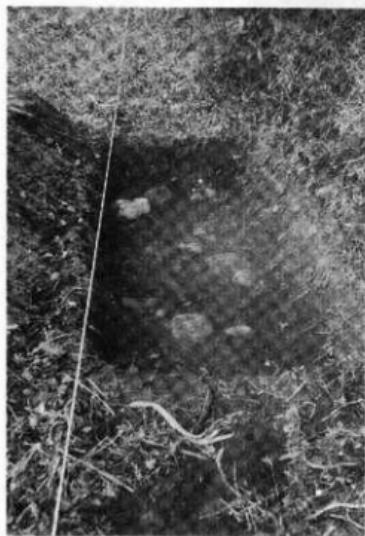
第2 トレンチ遺構検出状況（1次）



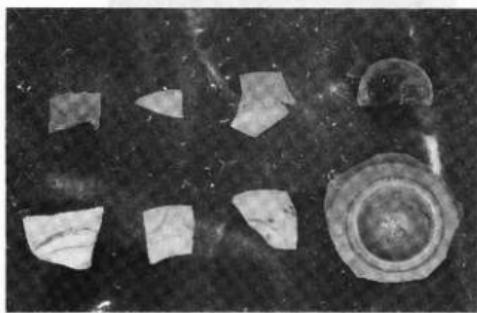
第1 トレンチ検出状況（2次）



第2 トレンチ配石状遺構検出状況



第3 トレンチ検出状況



出土遺物 1～8

2 串木第 2 遺跡

2 串木第 2 遺跡

例　　言

1. 本報告は、西都市の誘致企業工場建設に伴い、平成元年度に実施した発掘調査報告である。
2. 発掘調査は西都市長からの依頼を受けて、西都市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成元年10月26日～11月10日までの間実施した。
4. 本書に使用した図の作成・編集は養方が行った。
5. 本書の執筆は、V.まとめを日高が担当し、その他は養方が担当した。
6. 本書の遺物実測は、福田と養方が行った。
7. 実測図の方位は、磁北である。
8. 土層・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖によるものである。
9. 出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

本文目次

I.	調査に至る経緯	28
II.	遺跡の位置と歴史的環境	28
III.	調査の概要	28
IV.	遺構と遺物	29
1.	縄文時代の遺構と遺物	29
2.	弥生時代の遺構と遺物	30
3.	古墳時代以降の遺構と遺物	36
V.	まとめ	37

挿図目次

第1図	遺構分布図	27
第2図	1号～3号集石遺構実測図・土層図	28
第3図	住居址・集石遺構・土坑及び柱穴分布図	31
第4図	住居址・集石遺構及び柱穴分布図	32
第5図	出土遺物実測図（縄文土器・弥生土器）	39
第6図	出土遺物実測図（弥生土器・上師器・石器）	40
第7図	出土遺物実測図（石斧・石錐）	41

表目次

表1	縄文土器観察表	33
表2	弥生土器観察表	33
表3	石器観察表	34

図版目次

図版1	45
図版2	46
図版3	47

I. 調査に至る経緯

本調査は西都市の誘致企業㈱益岡製作所・九州の工場建設に伴って実施したものであるが、このことは、市民より「串木台地の東端がすでに造成されているが、遺物等が散布しており、調査はしなくてもいいですか」との連絡がありわかったもので、さっそく現地調査に向かった。その結果、造成はすでに終了しているものの、遺物が散布しており、また、造成の深さもわりと浅く、土層の残存状況も良好であり、遺構が残存している可能性が高く、工事によって地下遺構に影響を及ぼすと考えられることから、市の担当課である企画開発課と埋蔵文化財の保護について協議を重ねた。

協議の結果、企画開発課としては、すでに造成工事も終了し、誘致に関する契約も済んでおりこと等から計画変更は困難であり、事前に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

なお、調査は工場が建設される部分のみで、その他の部分については現状維持ということで協議が成立している。

発掘調査は西都市教育委員会が主体となり実施し、調査は平成元年10月26日着手し、平成元年11月10日終了した。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

串木第2遺跡は、串木第1遺跡の北約0.2km、一段高くなった位置にあり、標高35mで第1遺跡とは5mの比高差がある。この串木第1遺跡周辺は多くの遺物が散布しており、昭和60年度の遺跡詳細分布調査においても、多量の弥生土器・土師器等の上器片をはじめ石錐・石斧・剝片石器等石器も多く発見されている。中でも、石錐から40点も発見され、漁撈を中心とした生活が営まれていたと考察されることから、たいへん興味ある遺跡である。

なお、周辺地域の遺跡及び歴史的環境については、1. 串木第1遺跡のⅢにおいて記載しており、ここでは省略する。

III. 調査の概要

調査は、工場建設部分以外現状保存されることから総敷地面積8,040m²のうち、工場が建設される2ヶ所の計500m²のみ実施した。

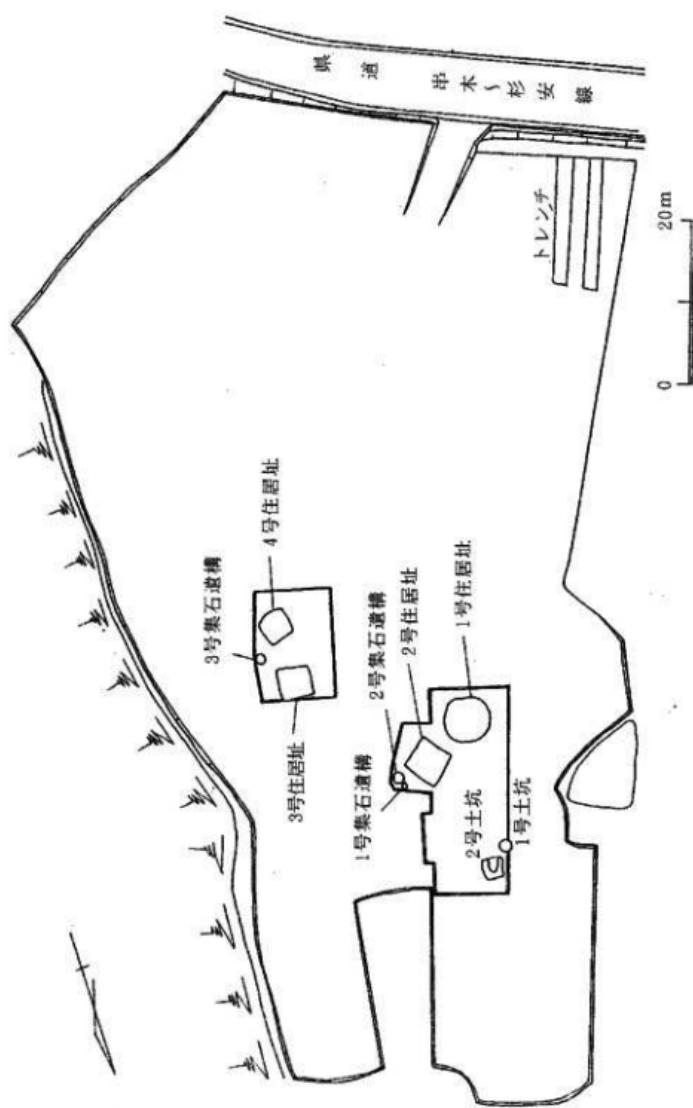
本遺跡においては、アカホヤ層はすでに造成によって削平され残存しておらず、アカホヤ下層の褐色土を基準として遺構等の確認を行った。

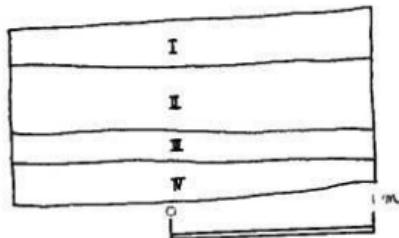
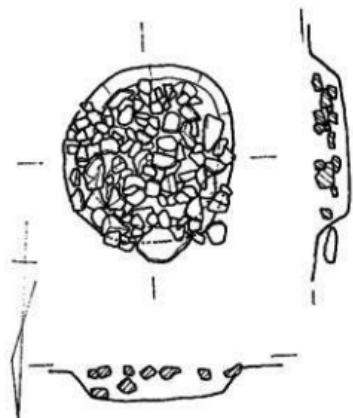
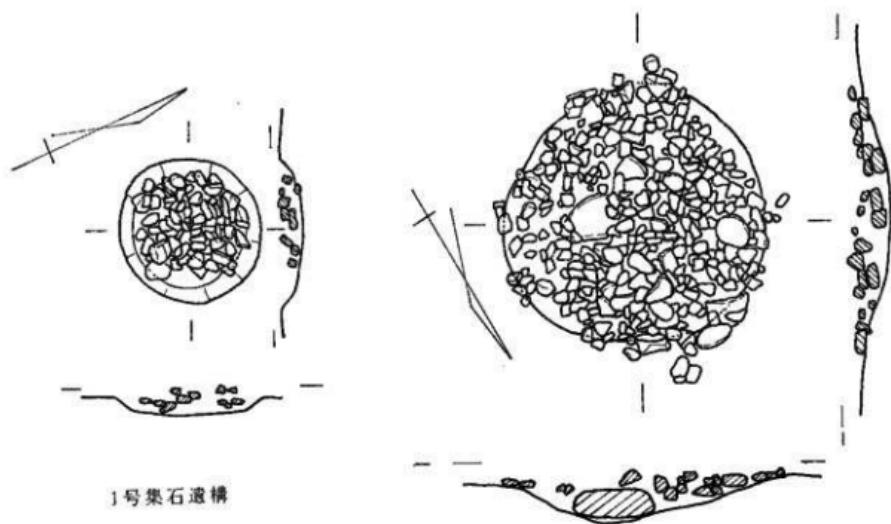
調査の結果、遺構として縄文時代の集石遺構3基・弥生時代中期後半～後期にかけての住居址3軒・古墳時代の住居址1軒の計4軒の住居址・土坑2基及び柱穴群を検出した。

また、遺物は縄文時代早期～晚期にかけての縄文土器をはじめ弥生土器・土師器、有肩打製品斧を含む打製石斧や半磨製石斧・石錐・スクレイバー及び多量の石錐が出土している。他遺跡と比して石錐が多いのが目に付く。

これらのことから、本遺跡は縄文時代からの長期間に渡って人間の生活の場として営まれていたことが確認されたとともに、石器組成が市内他遺跡とは様相を異にしており、一ヶ瀬川を中心とした漁

第1図 遺構分布図





0 2 m

第2図 1号～3号集石遺構実測図・土層図

撫生活という社会構造を呈していたことがうかがえる。

IV. 遺構と遺物

1. 繩文時代の遺構と遺物

(1) 遺 構（第3図）

集石遺構3基を確認している。直径0.75～1.35m、いずれも円形プランで、わずかではあるが掘込みを有している。

1号集石遺構は、2号住居址の東側から検出したもので、直径0.75mの円形プランを呈している。掘込みは浅く0.1mを計る。共伴遺物は確認されない。

2号集石遺構は、1号集石遺構の南側に近接し、直径1.35mの円形プランを呈している。掘込みは凹レンズ状で浅く0.1mを計る。共伴遺物は黒曜石製の石鏃が出土しているのみである。

3号集石遺構は、4号住居址の東側から検出したもので、直径0.85mの円形プランを呈している。掘込みは浅く0.1mを計る。掘込みの底部から炭化物が出土している。共伴遺物は確認されない。

これら集石遺構は、いずれも5～20cmの礫が掘込み内に無規則に集積されている。また、共伴遺物に乏しく構築年代については判断しにくいが、周辺から出土した遺物及び確認された土層、さらに出土地況から繩文時代早期の遺構と推定される。

(2) 遺 物（第5図）

繩文土器（第5図1～12）

出土点数は60点を数えるが、同時代の遺構に共伴してではなく、周辺及び弥生時代～古墳時代住居址の埋土内から出土している。型式的には、山形押型文土器・貝殻条痕文土器・塞ノ神式土器・曾畠式土器・草野式系土器・刺突文土器・三万田式土器・精製浅鉢型土器等バラエティーに富んでいる。いずれも小片・少量で、わずか1点しか出土していないものも多い。また、全体的に文様が施されているもののが少なく、細分類は不可能であり、ここでは資料紹介のみに留まった。なお、詳細について観察表を掲載している。

1は山形押型文土器の胴部で、横位に山形押型文を施している。2～4は円筒目殻条痕文土器の口縁部で、2は口縁端部に刺突連続、胴部に斜位の貝殻条痕を施し、3は斜位・4は平行に貝殻条痕を施している。文様及び器形等から前平式土器のバリエーションに含まれる。5は平行する凹線内に撲糸文を施した塞ノ神式の胴部で、塞ノ神A b式である。6は口縁部に平行の凹線を幾条にも施した曾畠式土器の口縁部で、口唇部に刻目を施している。曾畠式土器の終わりに近い曾畠直式と思われる。7は口縁部が「く」字状を呈し、平行に幾條にも沈線を施した三万田式系の土器である。8は口縁内側に細い棒状のもので1条連続に施した刺突文土器の口縁部である。9は粘土紐をJ字状に曲げたもの、及び短い平行沈線を口縁部に施した装飾土器である。10は口縁部下位に貝殻腹縁によって斜位に連続刺突を施した草野式系土器である。11は黒色磨研の著しい精製浅鉢型土器の口縁部、12も同様、精製浅鉢型土器の胴部片である。いずれも丁寧なヘラ磨きが施されている。

時代的には、山形押型文土器・貝殻条痕文土器・塞ノ神式土器が早期に、曾畠式土器が前期に、草野式系土器・刺突文土器・三万田式系土器・精製浅鉢型土器・装飾土器が後期に比定される。

石 器（第6図34・35）

わずかに石鎌1点・スクレイバー1点が出上している。34は2号集石遺構から出土したもので、形態的には二等辺三角形、基部が仰基式のものである。石材は、黒曜石である。35は1号住居址の埋土内から出土したもので、貞岩製である。

2. 弥生時代の遺構と遺物

（1） 遺 構（第3図・第4図）

本遺跡検出の住居址4軒のうち3軒（1号・3号・4号住居址）が同時代の住居址と考察される。プランは不整の円形プランのものと方形プランのものに分かれる。時代的には遺物等から若干の時期差が見られる。

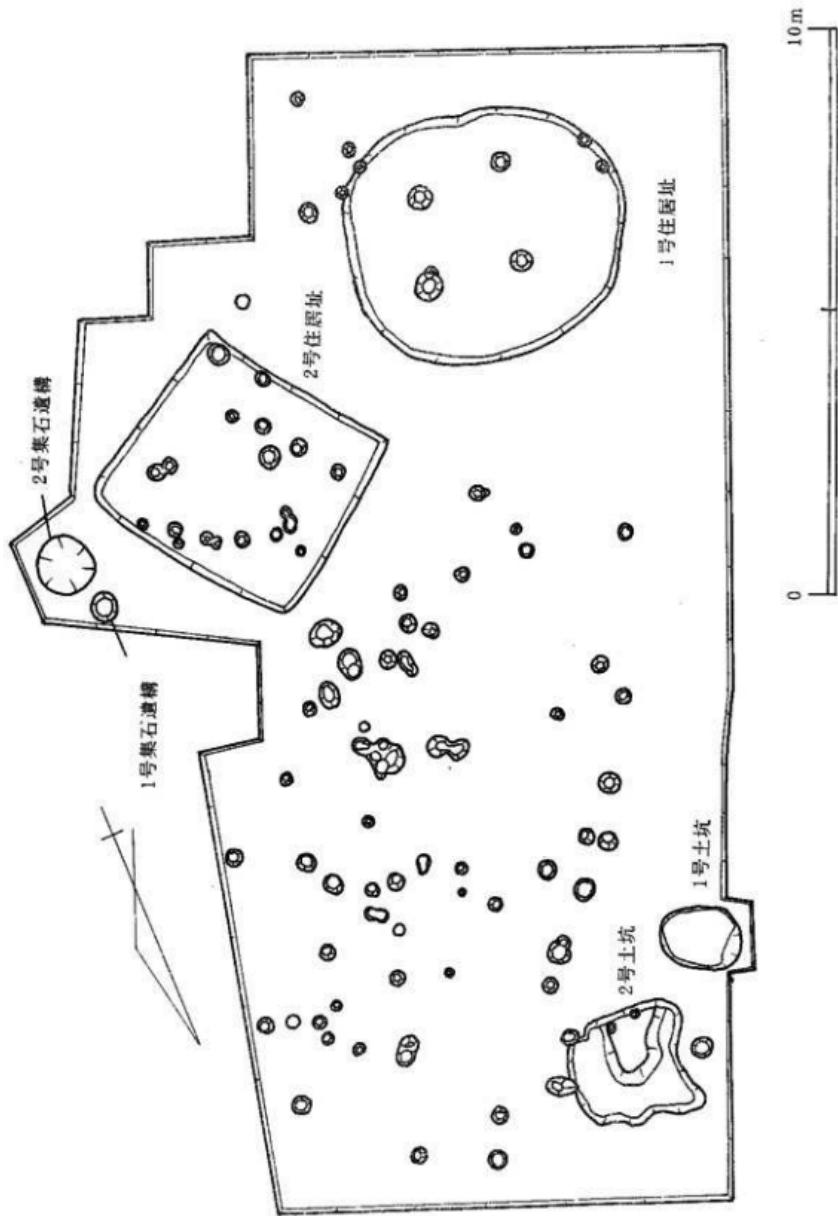
1号住居址は、不整円形プランの堅穴式住居址で、長径6.25m・短径5.35mの規模を有する。床面は、中央がやや深んだ凹レンズ状になっている。壁面は、約30度で立ち上がり、壁高は8~10cmを計る。また、円形柱穴を7個検出しているが、そのなかで同住居址に伴うものは方形に配されている1個で、径45~60cm・深さ35~40cmを計る。遺物は縫先伏口縁を有する大型の壺の口縁部（20）や口縁下部に刻目突帯を有する下城式系の甕型土器の口縁部（14~16）等の弥生土器をはじめ肩打製石斧（39）・石鍤・磨製石鎌（37）・砥石（38）等の石器が出土している。

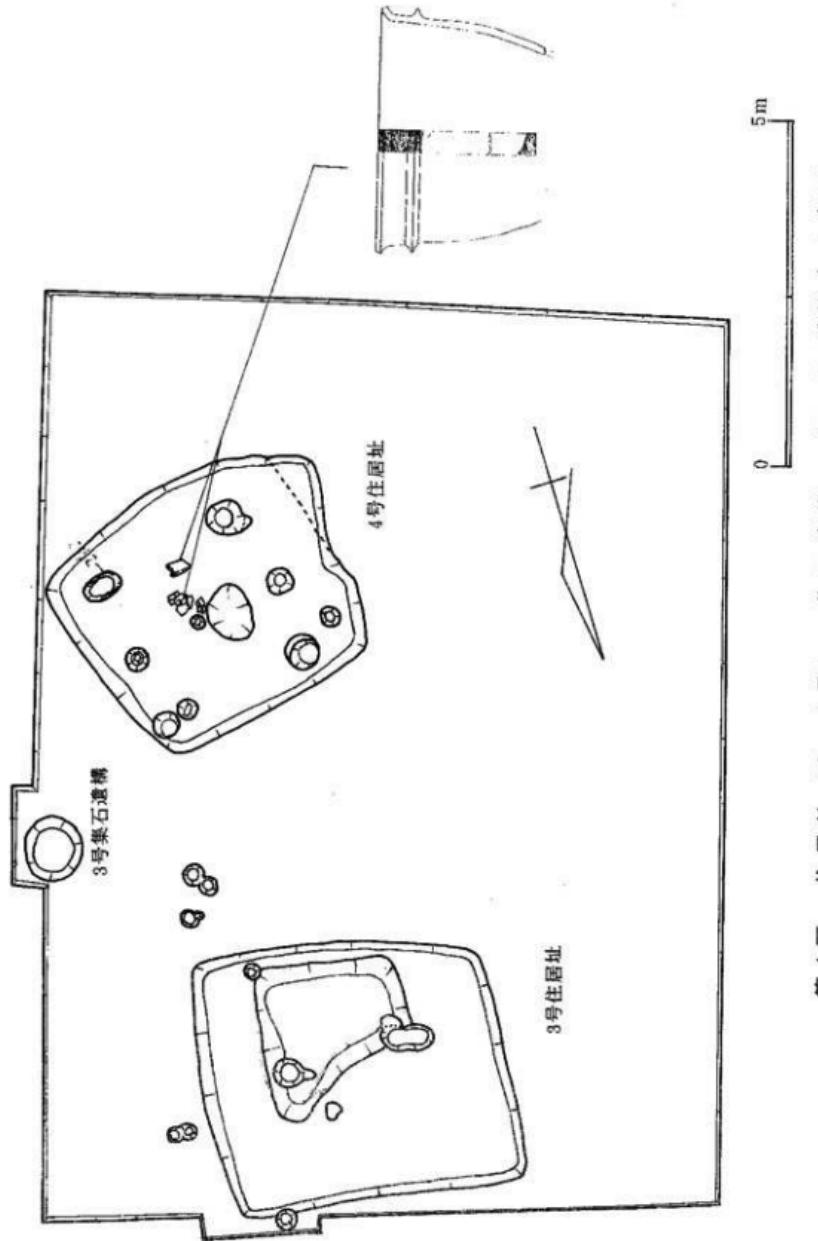
3号住居址は、方形プランの堅穴式住居址である。長軸4.3m・短軸3.7mの長方形を呈し、南側は曲線的で、全体的にはやや不整形である。床面は1号住居址同様凹レンズ状になっており、南側には不整形の凹みが掘り込まれている。この住居址に伴うもののか判断がつきにくいか、検出状況等から後世のものであると推定される。壁高は低く2.5~7.5cmを計る。柱穴は切合しているのも含めて7個検出している。同住居址に伴うのは中央部東西に2個配されているもので、径40~50cm・深さ20cm前後を計る。遺物は、わずかの弥生土器と肩打製石斧（40）・半磨製石斧（42）が出土している。

4号住居址は、3号住居址の5m南、西側が不整形に突出した方形プランの堅穴式住居址である。一方約3.5mの規模を有している。床面はほぼ直線的で、中央部に長軸75cm・短軸60cm精円形状の凹みを有している。壁面は北・南・東側はしっかりしているが、西側は不整形で、1cm前後と低い。その他壁面は10cm前後を計る。柱穴は10個検出しているが、同住居址に伴うものは、東西に一列に配されている6個あるいは4個と推定される。遺物は、口縁が「く」字状を呈した甕型土器（26）等の弥生土器をはじめ肩打製石斧（41）・石鍤等の石器がわずかではあるが出土している。

これらの住居址は、共伴遺物等から1号住居址が弥生時代中期後半～後期前半、3号及び4号住居址が弥生時代後期前半に構築されたものと考察される。

第3圖 住居址（1・2号）・集石遺構（1・2号）・土坑及び柱穴分布図





第4図 住居址（3・4号）・集石遺構（3号）及び柱穴分布図

表 1 細文土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		施成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第5回	1	深鉢	脚部	横位の山形削型文	ヨコナデ	良好	赤褐色 2.5YR4/6	赤褐色 2.5YR4/6	2mm前後の 砂粒を含む	
~	2	~	口縁部	貝殻腹足による斜位の連続削突 斜位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕 ヨコナデ	良好	褐灰色 5YR4/1	赤褐色 2.5YR4/6	~	施文の仕方が難
~	3	~	~	斜位の貝殻条痕文	斜位の貝殻条痕文	やや不良	赤褐色 2.5YR4/5	赤褐色 10T8/8	白雲母混入	
~	4	~	~	横位の貝殻条痕文	横位の貝殻条痕文 ナデ	良好	棕色 7.5YR7/6	棕色 7.5YR7/5	白雲母混入 金雲母混入	
~	5	~	脚部	縦位 四輪文 斜位の墨文	貝殻条痕文	やや不良	棕色 SYR6/6	棕色 SYR6/6	~	
~	6	~	口縁部	横位の四輪文 口縁部に刻目	茶痕文	良好	暗赤褐色 2.5YR3/1	赤褐色 10T2/4	白雲母混入	口縁部が平坦
~	7	~	~	4条横位の四輪文	ヨコナデ	良好	にぼい緑 7.5YR7/4	にぼい緑 7.5YR7/4	~	口縁部が三角形状 に肥厚
~	8	~	~	ナデ	4列横位の連續削突文	良好	棕色 2.5YR6/8	にぼい緑 SYR7/4	~	
~	9	~	~	粘土縫をU字状(円形状)に貼付 横位の履足跡	ヨコナデ	やや不良	棕色 7.5YR7/6	棕色 SYR7/6	白雲母混入	口縁部が肥厚 茶褐色土器
~	10	~	脚部	斜位の貝殻腹足による連続削突文	ヨコナデ	良好	明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色 2.5YR5/8	白雲母混入	
~	11	浅鉢	口縁部	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	褐灰色 10T8/1	褐灰色 10T8/1	白雲母混入	黑色磨研土器
~	12	~	脚部	ヘラ磨き	ヘラ磨き	良好	赤灰色 2.5YR4/1	赤灰色 2.5YR4/1	白雲母混入	黑色磨研土器

表 2 弥生土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		施成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第5回	13	裏	口縁部	口縁部に刻目 口縁部に削目尖端 口縁部～ヨコナデ 脚部～底方向ハケ	口縁部～ヨコナデ 脚部～底方向ハケ	良好	棕色 SYR6/8	棕色 SYR7/8	2mm前後の 砂粒を含む	口縁部が平坦
~	14	~	~	~	口縁部～ヨコナデ	~	褐灰色 7.5YR4/1	棕色 7.5YR6/6	~	~
~	15	~	~	口縁部に刻目尖端 ヨコナデ	口縁部～ヨコナデ 脚部～底方向ハケ	~	にぼい緑 7.5YR7/4	浅黃褐色 7.5YR8/4	~	1号住居址出土
~	16	~	~	口縁部に刻目尖端 ヨコナデ	ヨコナデ	~	浅黃褐色 7.5YR8/4	にぼい緑 7.5YR7/6	~	1号住居址出土
~	17	~	~	口縁部に刻目尖端 ヨコナデ	ヨコナデ	~	赤褐色 10T8/4	黃褐色 7.5YR7/8	~	1号住居址出土
~	18	~	~	口縁部に尖端 ヨコナデ	茶痕 ナデ	やや不良	灰青褐色 10T8/2	褐灰色 10T4/1	~	1号部は丸い 2号住居址出土

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調整		色調		胎土	備考	
				外面	内面	焼成	外面			
第5図	19	壺	口縁部	口縁部に突起 ヨコナデ	ヨコナデ	やや 不良	淡黄褐色 7.5YR8/4	淡黄褐色 7.5YR8/4	3 → 前後の 砂粒を含む	口縁部は丸い 1号住居址出土
"	20	壺	"	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡黄褐色 10YR8/4	淡黄褐色 10YR8/4	"	點先状口縁 1号住居址出土
"	21	"	底部	底部に突起 ナデ	ナデ	良好	淡黄褐色 7.5YR8/5	淡黄褐色 7.5YR8/5	あるいは	
"	22	"	底部	突起 ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐灰色 10YR6/1		"	裏面剥離 1号住居址出土
"	23	壺	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	灰褐色 10YR4/2	灰褐色 10YR7/3	2 → 前後の 砂粒を含む	1号住居址出土
"	24	"	底部	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	淡黄褐色 7.5YR8/4	褐褐色 2.5YR3/1	"	やや上底 1号住居址出土
"	25	"	"	ナデ	ナデ	やや 不良	にぶい粒 7.5YR7/3	にぶい粒 7.5YR7/3	あるいは	平底で柱状 1号住居址出土
第6図	26	"	口縁部	口縁部に突起 ヨコナデ	ヨコナデ	良好	にぶい粒 7.5YR6/3	にぶい粒 7.5YR6/3	"	「く」字状口縁 制御にスス付有

表3 石器類別別名

単位：mm

図面番号	遺物番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	石質	備考
第6図	34	打製石斧	1. 6	1. 4	0. 4	黒曜石	2号東石遺構
"	35	スクレイパー	7. 1	4. 8	0. 9	頁岩	1号住居址
"	36	磨製石斧	6. 5 + α	2. 6	0. 5	綠泥片岩	本製品
"	37	"	3. 5	2. 0	0. 2	赤色頁岩	1号住居址
"	38	砥石	12. 0 + α	10. 4	4. 3	砂岩	1号住居址
第7図	39	有肩打製石斧	6. 6 + α	5. 3	1. 7	頁岩	刃部欠損・1号住居址
"	40	"	8. 3 + α	7. 1	1. 9	安山岩系	" 3号住居址
"	41	"	13. 0	6. 2	2. 1	頁岩	4号住居址
"	42	半磨製石斧	10. 7 + α	5. 3	2. 5	"	柄部欠損・3号住居址
"	43	磨製石斧	9. 6	4. 5	2. 2	"	刃部破損・2号住居址
"	44	石錐	6. 9	6. 6	1. 3	"	打ち欠き
"	45	"	7. 2	6. 5	2. 2	"	"
"	46	"	6. 2	5. 7	1. 2	"	"
"	47	"	6. 7	5. 1	1. 4	"	" 4号住居址
"	48	"	8. 5	5. 6	1. 8	"	"
"	49	"	7. 5	5. 6	1. 9	"	" 1号住居址
"	50	"	7. 7	6. 2	2. 2	"	"
"	51	"	11. 1	4. 2	2. 1	"	"
"	52	"	7. 3	6. 1	2. 3	砂岩	" 3号住居址
"	53	"	7. 9	8. 3	2. 0	"	"
"	54	"	6. 5	6. 1	1. 7	"	"

(2) 遺物（第5図～第7図）

器種は豊富である。弥生土器・有肩打製石斧・打製石斧・半磨製石斧・石錐・磨製石錐砥石が出土している。

弥生土器（第5図13～第6図26）

遺物総数の75%にあたる400点程が出土している。ほとんどが小片で、唯一反転復元できうるのは4号住居址から出土した壺型土器のみである。

ほとんどが壺型土器で、口縁部が「く」字状を呈しているもの（23～26）、口縁下部に刻目突帯を施す下城式系のもの（13～17）、口縁下部に突帯を施すもの（18～19）が出土している。

20は鋸先状口縁を呈した大型壺の口縁部、21は大型壺の頸部、22は大型壺の胸部である。24はやや上底ぎみの底部、25は柱状の底部で、いずれも壺型土器の底部である。

なお、弥生土器の詳細については観察表を掲載したので参考にしていただきたい。

土錐

2号集石遺構の近くから1点出土している。長さ8.0cm・中央幅1.2cm、胎土は微妙粒を含み、浅黄褐色を呈している。

石斧（第7図39～43）

有肩打製石斧4点・打製石斧1点・磨製石斧1点・半磨製石斧1点の計7点出土している。39は最大長6.5cm・最大厚1.7cmを計る頁岩製、40は最大長8.2cm・最大厚1.8cmを計る安山岩系の有肩打製石斧で、下部が欠損している。41は完形品で最大長13.0cm・幅（下部）6.1cm・最大厚2.2cmを計る頁岩製の有肩打製石斧である。42は短冊型の半磨製石斧で、上部が欠損している。最大長10.9cm・刃部幅5.3cm・最大幅5.4cm・最大厚2.3cmを計る頁岩製の石斧である。43は橢形の磨製石斧で、刃部についてもともとは磨きが施してあり、使用して破損したため打製石斧状になっていると思われる。最大長9.4cm・最大幅3.5cm・最大厚2.1cmを計る頁岩製のものである。

石錐（第6図36・37）

磨製石錐が2点出土している。36は未完成の綠泥片岩製で、最大長6.5cm・最大幅2.5cm・最大厚0.5cmを計る。37は二等辺三角形を呈した平基式の赤色頁岩製で、最大長3.5cm・最大厚0.1cmを計る。

石錐（第7図44～54）

石器としてはいちばん目に付く。形状としては円形に近いもの（44～46）、橢円形のもの（47～50・52）、長楕円形のもの（51）、三角形（おむすび型）に近いもの（53・54）に分類され、橢円形のものが最も多い。すべて長軸に打ち欠きを有する。石材は砂岩（52～54）と頁岩（44～51）が使用されている。

砥石（第7図38）

砂岩製のもので、上面・両サイドの3面が使用されている。しかも、かなり使用されており、面が凹レンズ状になっている。欠損はしているものの12cm程が残存している。

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 遺構（第3図）

住居址1軒とその北側を中心にして柱穴群が確認されている。また、調査区のいちばん北側から円形と不整形の土坑も確認している。

住居址

1号住居址の東5m、方形プランの堅穴式住居址である。一辺4.7m、壁高は5cm前後と低い。床面は直線的で、19個の円形柱穴を検出している。径20~50cm・深さ5~37cmを計るが、配列については不明である。

遺物は、土師器・弥生土器・石錐・磨製石斧(43)等が出土しているが、主体をなしているのは土師器高環(27~29)を中心とした土師器で、その他については出土状態から混入というのが妥当である。

柱穴

2号住居址の北側を中心に検出した柱穴は、総数110個を数える。すべて円形ではあるが、径15~60cm・深さ5~70cmと大小様々である。獨立柱建物の規模は柱穴が集中しており、確認できなかった。

土坑

円形土坑1基(1号土坑)と不整形土坑1基(2号土坑)の計2基で、調査地の北部、接近して検出した。

1号土坑は、長軸1.8m・短軸1.4m、深さ15cm前後を計る。2号土坑は不整形の方形で、一辺2.2m、上縁は出入りがはげしい。床面南側は北に向かって突出している。

1号土坑からは绳文土器が出土しているが、混入の可能性が高い。2号土坑からは遺物は出土していない。使用目的及び構築年代等については不明である。

(2) 遺物（第6図）

古墳時代遺構の遺物としては、土師器約30点・須恵器1点・須恵質土器1点・陶器3点が出土している。

土師器は高環・甕あるいは深鉢・壺が主体をなしている。27~29は2号住居址出土の高環脚部で、やや膨らみを持った脚部である。胎土はわりとあらく、浅黄橙色を呈している。30~32は環の底部で、すべてヘラ切り底である。色調は30が橙、31・32が浅黄橙色を呈し、胎土はこまかく微砂粒を含む。

須恵器・須恵質土器は小片で不明な点が多いが、甕あるいは壺等の破片と思われる。

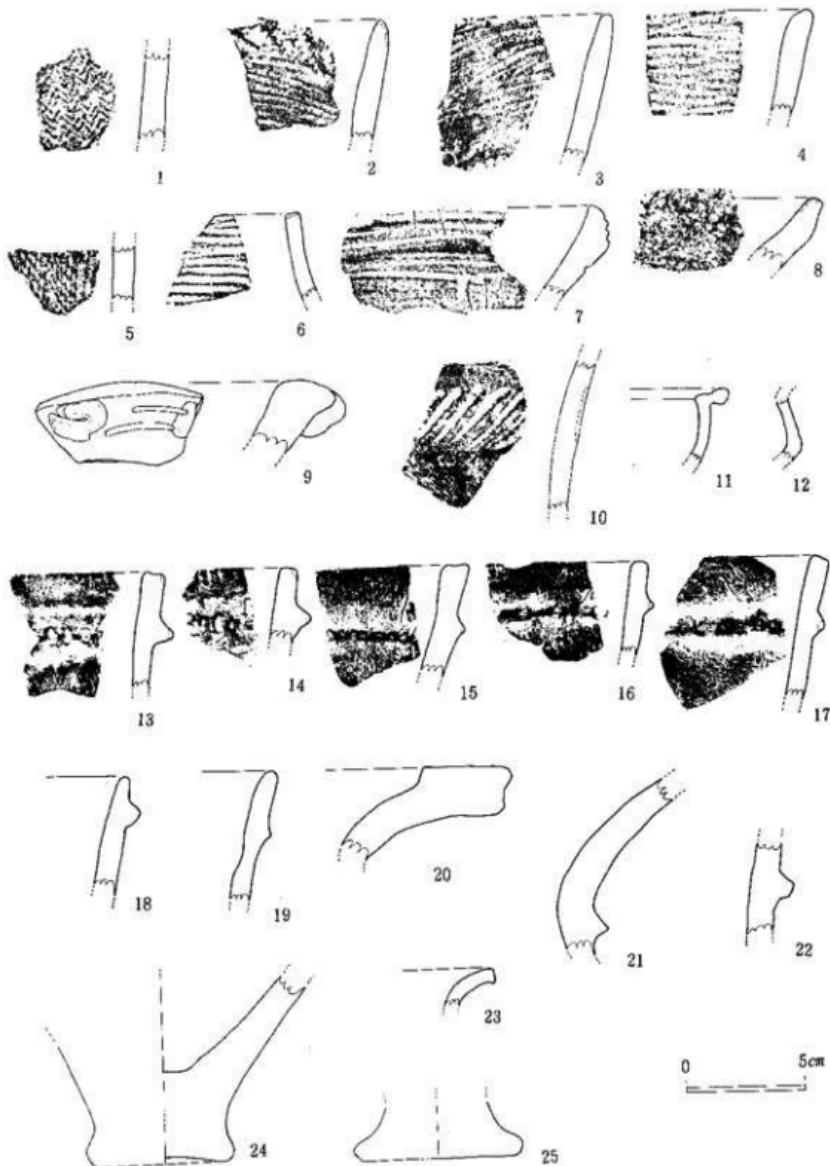
陶器は、わずか3点のみで、33は高台付小鉢の底部で、高台径5cm・高さ0.6cmを計る。

この串木第2遺跡の発掘調査においては、早期縄文時代の集石造構3基、および弥生時代関連の住居址4ヶ所が発見されたが、以下、主として、この住居址について論述してみたい。まず、第1号住居址であるが、この竪穴式住居址は、やや細長で変形状の円形プランを呈していたが、強いていえば、方形の角隅を円形化したような特殊形式である。そして、その内部には4個の柱穴が設けられていた。それから、この住居址からの出土遺物としては、弥生式土器および石器類がある。そして前者で特徴的のものとしては、鋸先状口縁を有する大型の弥生式壺形土器と口縁部に刻目突帯文をもつ土器である。最初にあげた鋸先状にあたる口縁の平坦部分でも約3.5cmもあり、この形式の土器は、弥生中期半ば頃から後半にかけての時期に相当すると推定されるが、また一方、刻目突帯文を有する下城式土器も、その突帯が三角形状を呈していることもあるて弥生中期末葉前後に想定できると思われる。なお、弥生時代中期の方形住居址が形態上の変化をし始めるのは、この時期あたりがその初現期にあたると考える。そのようなことで、この第1号住居址の編年を弥生中期末から後期初頭にかけての時期に推定した。それからこの1号住居址と同じ時期頃の住居址の発見は、県内において極めて少ないのであるが、1ヶ所だけ、この遺跡のある丘陵台地の続きで、少し一ヶ瀬川を下った左岸台地上に新田原遺跡が存在する。この遺跡からは、花辨状型住居址も発見されて話題を呼んだのであるが、そのほか変形の住居址も現われた。また、出土の弥生土器も刻み突帯文を有する下城式土器なども検出され、両遺跡は時期的に類似した遺跡とみなすことができる。さらに、第1号住居址に次ぐ遺構として、第3号、4号住居址をあげたい。特に、第4号からは、口縁部が「く」の字形に外反りし、一條の突帯文をめぐらす變形の弥生土器も出土しているので、弥生土器の編年上からも、この4号、3号の両住居址を弥生後期初頭から前半にかけての時期にあてるにした。なお、この変形住居址に関して興味深いのは、串木第2遺跡のような初現期の遺跡に相応する弥生遺跡が、隣県の鹿児島県、大分県で発見されていることである。前者では、鹿屋市の王子遺跡であるが、くの字状口縁部をもつ變形弥生式土器などが多量に出土し、形態的にも各種変形住居址が発見された。また、同県隼人町の小田遺跡においては、花辨状型住居址も現われ、その編年を王子遺跡と同様、中期末に比定している。それから、後者では、大野郡犬飼町の舞田原遺跡において花辨状型住居址などの変形住居址も現われている。ここで、この串木第2遺跡出土の石器について考察してみたい。この遺跡につき、関心をそそられるることは第1号、第3号、第4号の各住居址から、それぞれ各1点ずつ有肩打製石斧が発見されていることである。この石器は主として南九州に分布する出土遺物であり、その有肩打製石斧の使用された時期も、乙益重隆氏の論考によると、弥生中期末から後期にかけて年代に推論されている。そのことは、初現期の変形住居址とみなされる1号住居址の編年とも合致することになる。それから最後に、第2号住居址について述べてみる。この住居址だけは、ほかの3ヶ所の住居址と異り、時期的にも少々下るようである。内部から出土した土器に、庄内式に見られる叩き文も認められ、また、住居址の形態も比較的に整然とした方形を呈しているが、全体的に見ると、少しひずみを有している。さて、この2号住居址の編年であるが、一応、弥生終末期から土師器初頭頃に推定したい。以上、串木第2

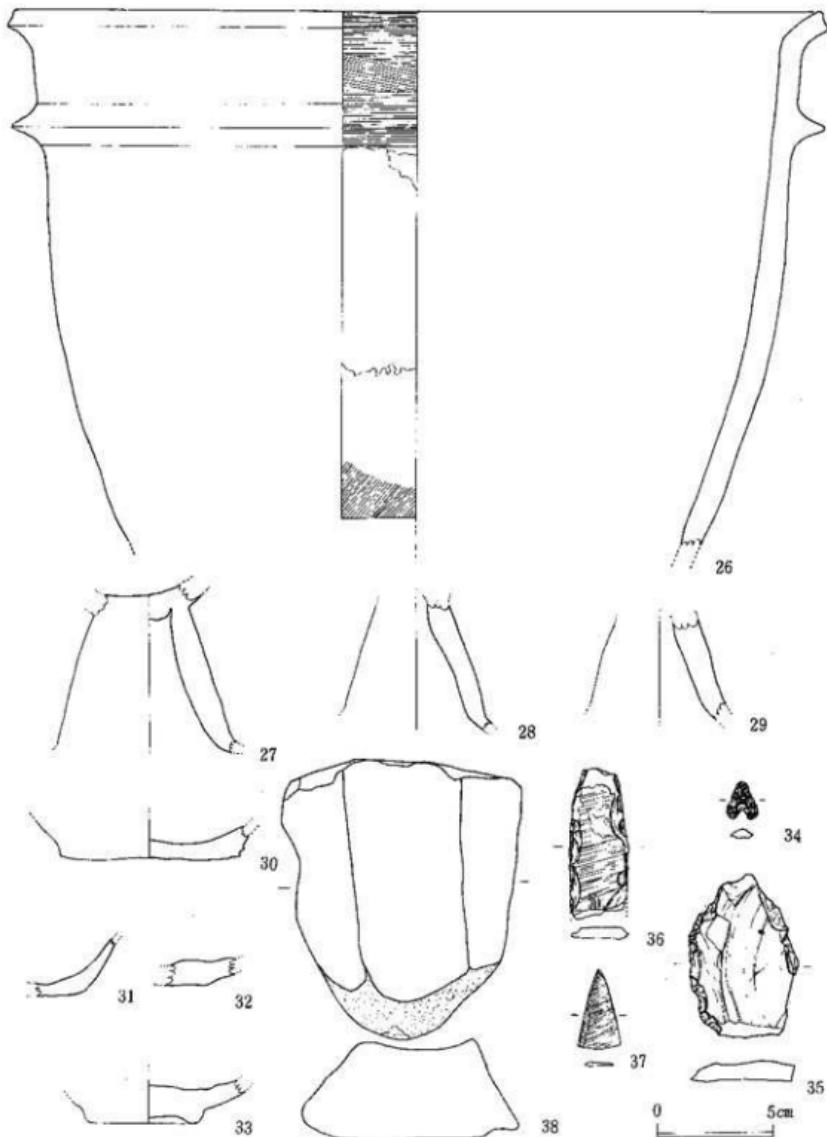
遺跡にて発見された4ヶ所の竪穴式住居址について考察してきたが、日向地方においては、弥生時代後期初頭頃から終末期にかけて、全国的に見ても特殊な変形住居址が構築されるようになる。そして、^⑤西都市でも、昭和58年と59年の両年にわたり、寺原第1・^⑥第2遺跡において、内部突出型の変形住居址が現われた。なお、宮崎市における学園都市遺跡の発掘調査においても各種形式の変形住居址が発見された。このように、弥生時代の後期を中心にして日向に出現する特殊形式の竪穴式住居址を筆者は、「日向型変形住居址」と称している。^⑦

註

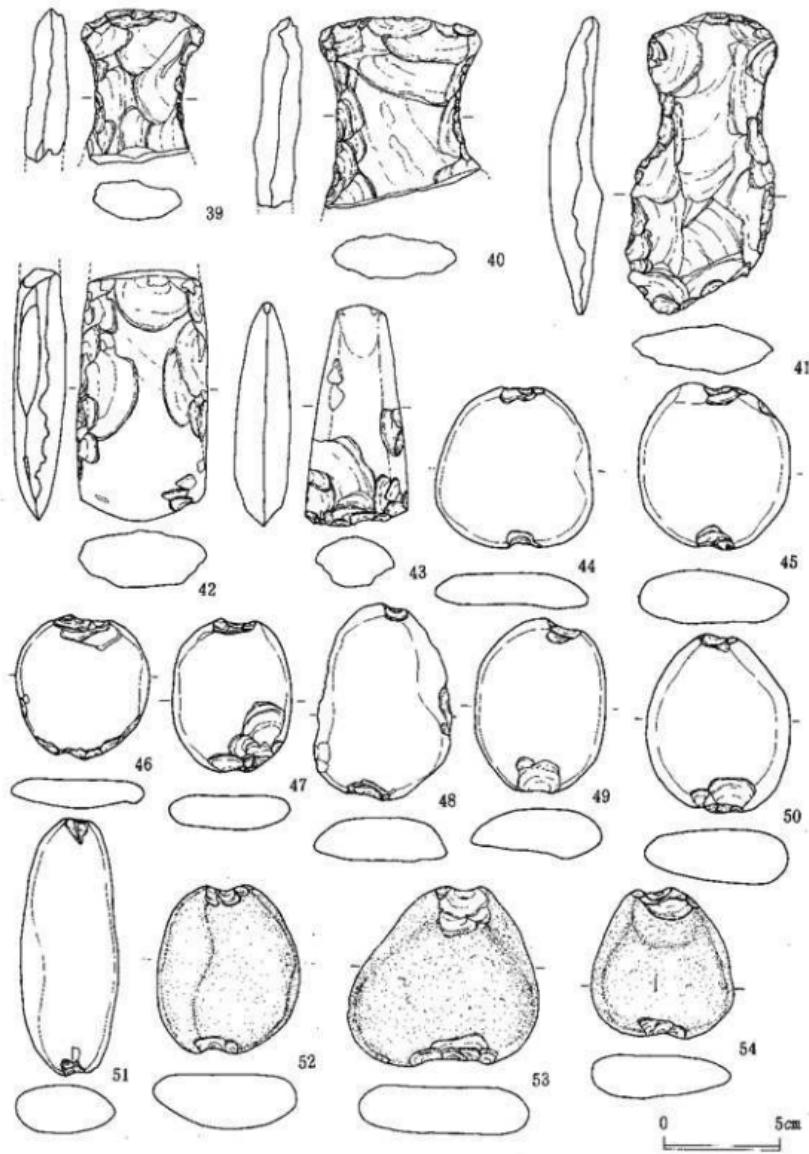
- (1) 新富町教育委員会『新田原遺跡』宮崎県兒湯郡新富町文化財調査報告書第4集、1986年3月
- (2) 鹿児島県教育委員会『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34) 1985年3月
- (3) 鹿児島県住宅供給後者『小田遺跡』小田遺跡発掘調査報告書、1981年8月
- (4) 犬飼町教育委員会『舞田原』大分県大野郡犬飼町所在の弥生・古墳時代集落跡発掘調査報告書、1985年3月
- (5) 乙益重隆「有肩打製石器小考」「日本史の黎明」八幡一郎先生頌寿記念考古学論集、1985年3月
- (6) 宮崎県教育委員会『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報』、1982年3月
- (7) 日高正晴「寺原第1遺跡－日向型変形住居址－」『西都原古墳文化考』西都原古墳研究所年報・第5号、西都市教育委員会、1988年3月
- (8) 西都市教育委員会『寺原第1遺跡』『西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集、1985年5月



第5図 出土遺物実測図（縄文土器・弥生土器）



第6図 出土遺物実測図（弥生土器・土師器・石器）



第7図 出土遺物実測図（石斧・石錘）

中国书画函授大学

中国书画函授大学

图 版

中国书画函授大学

中国书画函授大学

中国书画函授大学

中国书画函授大学

中国书画函授大学

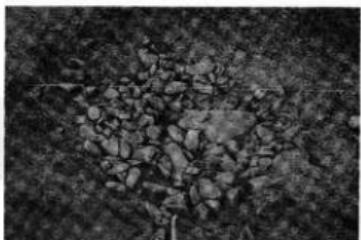
中国书画函授大学

蝶 図

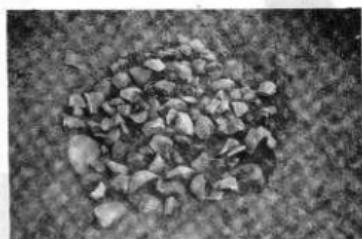
（蝶の図）



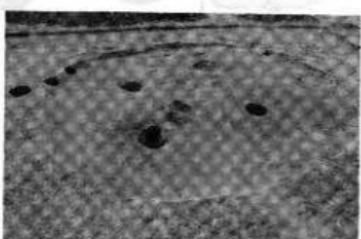
1号集石遺構検出状況



2号集石遺構検出状況



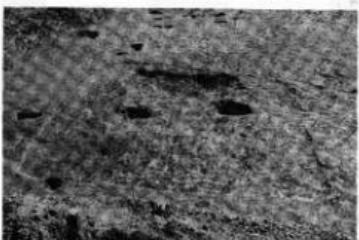
3号集石遺構検出状況



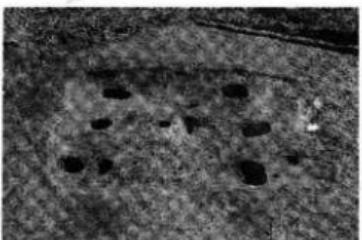
1号住居址 検出状況



2号住居址 検出状況



3号住居址 検出状況

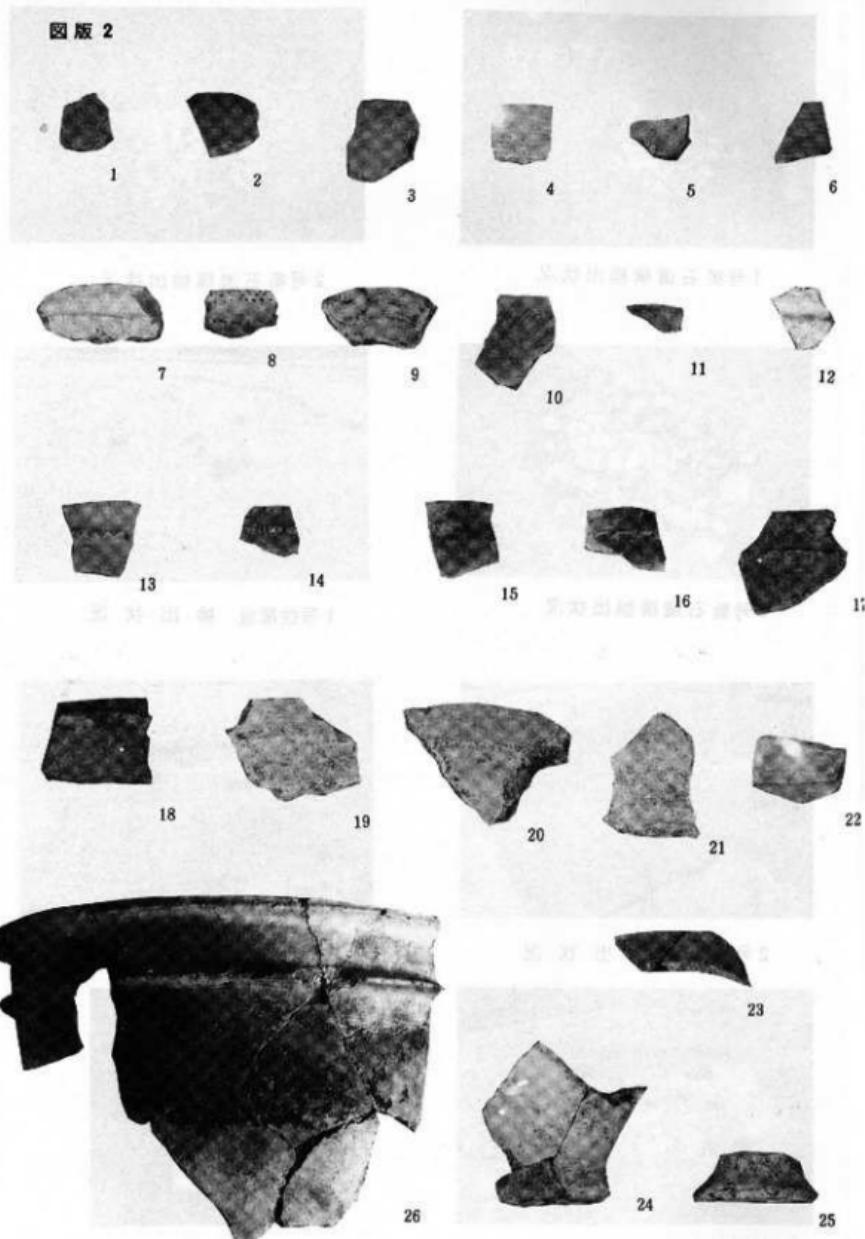


4号住居址 検出状況

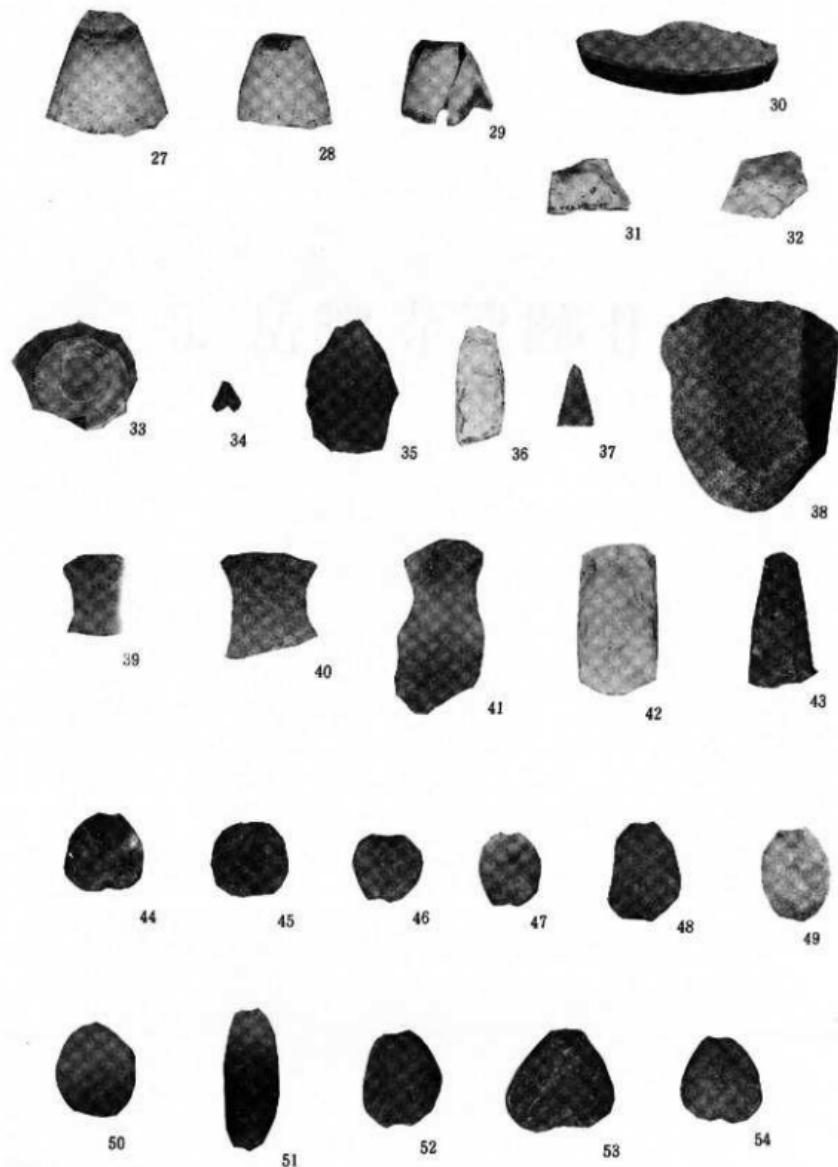


4号住居址内弥生土器出土状況

図版 2



図版 3



3. 岳惣寺遺跡 II

例　　言

1. 本報告は、岳惣寺遺跡の土採取に伴い、平成元年度に実施した発掘調査報告である。
2. 発掘調査は事業主・横山英宝氏の依頼を受けて、西都市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成元年6月20日～8月15日までの間実施した。
4. 本書に使用した図の作成は緒方が、編集は蓑方が行った。
5. 本書の執筆は、I. 調査に至る経緯・II. 遺跡の位置と歴史的環境を緒方が、V. まとめを日高が担当し、その他は蓑方が担当した。
6. 本書の遺物実測は、緒方が行った。
7. 本書に使用した遺構等の一部に略記号を付した。次のとおりである。
T - トレンチ・S - 方形状遺構・R - 円形土坑・P - 柱穴・D - 溝状遺構
8. 実測図の方位は、磁北である。
9. 土層・土器の色調は農林省水産技術会議事務局監修の標準土色帖によるものである。
10. 出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保管し、展示される。

本文目次

I. 調査に至る経緯	54
II. 遺跡の位置と歴史的環境	54
III. 調査の概要	56
IV. 遺構と遺物	57
1. 縄文時代の遺構と遺物	57
2. 弥生時代の遺構と遺物	59
3. 古墳時代以降の遺構と遺物	59
V. まとめ	69

挿図目次

第1図 遺跡位置図	52
第2図 遺跡周辺図	53
第3図 遺構分布図	61
第4図 住居址・溝状遺構実測図	63
第5図 方形状土坑（1～9号）実測図	64
第6図 方形状土坑（10～14号）・円形状土坑（1・2号）実測図	65
第7図 出土遺物実測図・拓影（縄文土器・弥生土器）	71
第8図 出土遺物実測図（土師器・瓦器・陶器）	72
第9図 出土遺物実測図（白磁・青磁・染付・土鍾・石鍾）	73
第10図 出土遺物実測図（石斧・古銭・鉄さい・敲石）	74

表目次

表1 縄文土器観察表	58
表2 土鍾・石鍾観察表	68

図版目次

図版1	77
図版2	78
図版3	79
図版4	80
図版5	81



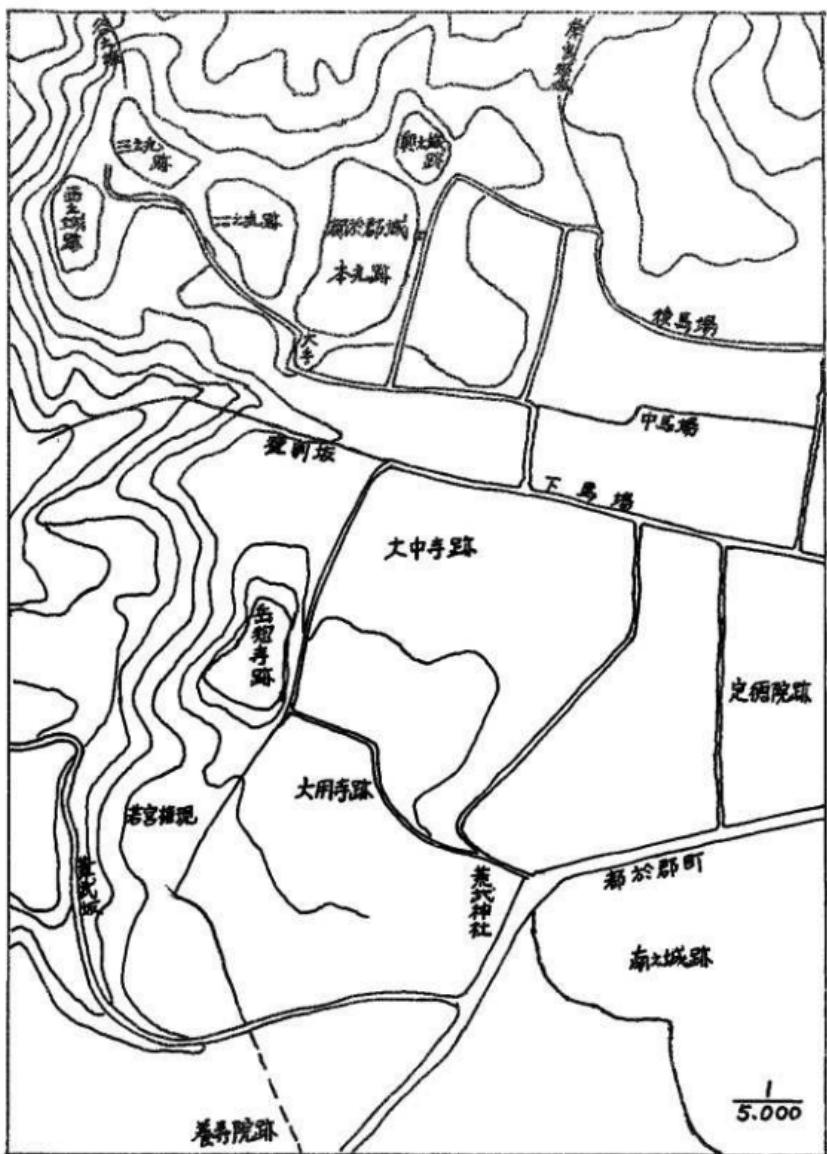
1 : 25,000

0 500 1000 1500 2000 2500

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
S001	都於郡村古墳	大字荒武387乙	円 墳	古 墳
S002	都於郡城跡	大字裏野田字高屋	城 跡	室町～江戸
S003	岳 惣 寺 跡	大字荒武字都於郡	鞍馬寺跡	禪文～江戸
S004	大 中 寺 跡	大字裏野田字高屋	寺 跡	室町～江戸
S005	定 德 院 跡	大字都於郡字向之城	寺 跡	江 戸
S006	南 / 城 跡	大字裏野田字中尾	城 跡	室町～
S007	円 光 院 跡	大字裏野田字円光院	寺 跡	室町～江戸

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
5008	常 楽 院 跡	大字裏野田字中尾	寺 跡	江 戸
5009	一 楽 院 跡	大字裏野田字向之城	寺 跡	室町～江戸
5010	黑 實 寺 跡	大字岩爪字園田	寺 跡	中世～江戸
5011	原 向 連 跡	大字裏野田字原口	散居地	禪文～平安
5012	東 / 城 跡	大字裏野田字原口	城 跡	室町～
5013	向 / 城 跡	大字裏野田字淺ノ下	城 跡	室町～
5014	日 慶 城 跡	大字裏野田字城内	城 跡	室町～

第 1 図 岳惣寺遺跡位置図



第2図 遺跡周辺図

I. 調査に至る経緯

岳惣寺遺跡は、業者による土採取事業に伴って、昭和63年7月19日から同年9月26日迄の間に、第1回の発掘調査を実施し、遺跡の約3分の1程の調査も終り、すでに土の採取事業が終了している。

同遺跡は、前回報告書でも述べているが、中世日向国を、242年に亘って支配した伊東氏一族の本拠地が都於郡城であり、城主8代祐充の菩提寺跡として、岳惣寺遺跡は周知される。

昭和60年度、西都市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査では、同遺跡の種別を散布地及び寺跡とし、時代を绳文～江戸と設定した埋蔵文化財包蔵地周知遺跡である。

開発に関しては、第1回調査時に於いても、事業者と再三の協議を行い、都於郡城と関連する重要遺跡として、遺跡の保護を要請したところであった。

しかし事業者は、家族業の零細企業であり、すでに高価な土地代金も支払い済みであって、事業の中止は死活問題にもつながる理由から、昨年の発掘調査を実施するに至った。

これにつづき、本年度も調査着手寸前まで残遺跡の保存協力を要請したところであったが、昨年同様の理由によって、やむなく記録保存の措置を講ずることとなった。

だが協議の中で、残地の内最重要と注目されていた北辺部が、寺院の中心施設跡として保護されることとなった。

発掘調査は、引き続き西都市教育委員会が実施することとなり、平成元年6月20日に着手し、同年8月15日終了した。

II. 遺跡の位置と歴史的環境

岳惣寺遺跡は、中世に於いて日向国を制覇した伊東氏累代の本拠地である都於郡城の奥張り内に在って、都於郡城中心5城郭の南約300mに位置する。

都於郡城に於ける伊東氏は、天正5年(1577)までの242年間をこの城で過しているが、その歴史は南北朝時代に遡り、室町幕府を開いた足利尊氏の配下にあった伊豆の伊東祐持が戦功等によって都於郡300町歩が贈与され、日向に下向してこの地に城を築いてより始まる。その時代は、「日向記」によると建武2年(1335)、「日向纂記」には延元2年(1337)と、別年に伊東氏の日向入りが記され、この時期を前後して都於郡に入って来たと思われる。

伊東氏はまた、歴史上に記録を留める鎌倉武士の工藤祐経を祖とし、嫡子祐時が伊東莊から伊東と改姓したもので、彼が伊東氏の初代となり、都於郡に下向した祐持は、伊豆國伊東氏の6代領主にあたる。

この祐持が、都於郡城主初代となり、岳惣寺を菩提寺とする祐充は、祐持の初代から歎えて8代城主であった。

現代に於いても冠指の都於郡城は、その奥張り範囲がほぼ台地上の全域に及ぶ広範囲なものであり、中心となる本丸・二の丸・三の丸・西の丸・裏の城(現代の呼称)の5城郭であって、台地上の北西端に位置し、凡そ350m×250mの地域に、今もその雄姿を見る事ができる。この5城郭を、現代

都於郡城跡と周知する人も多いが、東・北・西方の平野部を一望し、遠くは日向灘の海岸まで遠望できる城跡は、中世に於ける最遼の築城地であったと考察される。

平野部から城に上るには、荒武坂口・斐割坂口・谷之坂口・奈良瀬坂口・庄滑（六月）坂口・筑後永坂口・この坂口に佐土原道と薩摩道が加わり、これを都於郡城のハツ口と称する登り口があった。

登城口の一つ薩摩道は、都於郡台地の西端縁辺部を、略北方に向ってすすみ、眼下の三財平野から登ってくる荒武坂口、さらに斐割坂口と合して本丸の大手門へと直進する。

岳惣寺遺跡は、北方する薩摩道が荒武坂と合し、さらに斐割坂と合流する概略中間地に所在し、道路と台地縁辺の間に孤立する小高地で、三財平野を足下にしたすばらしい遠望の場所である。

近世に於ける都於郡城は、佐土原島津藩の外城として役割りを果たし、周辺に多くの侍屋敷が建ち並んだ衆中（土中）の里であり、今の都於郡もナヤ町と称され、佐土原藩三ヶ町の一つとしてにぎわった。

ナヤ町つまり都於郡町は、ゆるやかな坂道の町並で、上り詰めた西方端からは急曲して南に進み、約300m程で旧薩摩道と合する。

この急曲した町がしらの西方は、小高い丘となり伊東氏ゆかりの荒武神社がある。町がしらの道路急曲地からは、さらに荒武神社台地の裾部を直線に、西に向った小道がある。

この小道は、岳惣寺付近から大手道路と分かれ、都於郡町の南に位置した南之城へと連絡した道路である。

岳惣寺は、8代城主の菩提寺ではあったが、早期に廃毀され、その年月も詳らかにすることはできない。

祐充はまた、父7代城主尹祐が、都城盆地の野々美谷城外に於いて不慮の死を遂げたあと、14才にして家督を繼承し、戦国時代を過ごすこととなる。

しかし、天文2年（1533）8月28日、三財の田中（現小森・牧野地域）に於いて病により24才の生涯を閉じた。そして、「岳惣義考え岳惣寺殿」と称し、岳惣寺が建立された。

岳惣寺建立のとき、南東の道を隔てた至近の位置には、父尹祐の菩提寺「大用寺」が聳え立っていた。このように都於郡城の繩張り内には、各所に多くの寺院跡が確認される。

そしてこれらの寺院は、都於郡ハツ口周辺に所在し、敵方の攻撃を受けた際、直に城（砦）としての役割りを果たす目的を有した。

これらを総合して考察するとき、大用寺・岳惣寺も、他寺院と同様薩摩道・荒武坂・斐割坂、並びに大手道の守りとして、この地に建立されたと思われる。

岳惣寺の跡地から西方を望むと、眼下に三財川を伴った平野がL型に広がり、遠くにはとんがり山の連山が、北から南の霧島山にまでつながり、また、九州山地から突出した小豆野原台地が指呼の間まで延びてきている。

小豆野原台地の東方縁辺部には、70余基の三財古墳群が点在し、南東端には、伊東祐持が伊豆國から下向したとき勧請したという岩崎稲荷、さらには2代城主祐重が、都於郡城の大改築を行うにあた

って築いた、石野田の小城跡等の史跡も散見できる。

また小豆野原と平行し、間に三財平野を置いた国富町の岩郷原が、西都市との境界となって九州山地から延びている。

この台地の北端部に、伊東祐重ゆかりの中原城跡が畠がかって確認され、岳惣寺遺跡に立つとき、伊東氏に関係した古跡も各所に一望することができる。

近世の遺跡としては、岳惣寺の東方に隣接した大中寺跡がある。この地は、都於郡4代城主伊東祐立が長持寺を建立した土地であったが、天正5年（1577）都於郡落城後に焼失した。

その跡地に、佐土原入封の島津家久が、祖父の島津忠良の靈を弔うため、菩提寺としての大中寺を建立した。これが今の大中寺跡であり、岳惣寺遺跡の周辺は、今も中近世の遺跡が取り巻く歴史的な環境を保持している。

III. 発掘調査の概要

本年度に実施した第2次発掘調査の対象地は、岳惣寺遺跡台地の中央部にあって、面積は約1.500m²を対象に調査を実施した。

この遺跡は標高およそ100m程で、都於郡台地上にさらに小高く形成された地域で、概略3等分された畑作物であった。その北辺に岳惣寺の金堂等中心施設が建立されていたと考察されている。

また台地上は、南辺と北辺が中央より約50センチ程低いが、略平坦地形をなし、面としては北辺が狭く南端の広い概略三角形状の面形を成している。

本来の地形は、以上の現状から考察すると、中央部がわずかに高く、南・北へゆるく傾斜し、寺院等の宅地造成あるいは農耕の便宜上から現在の階層に形成されたものである。

調査は、中央部を対象としたもので、まず遺跡の保存状態及び土層の確認上、概略東西に幅1.5mのトレンチ、南北に同様のトレンチを各1本、調査地中心に軸にして十字形に入れた。

このトレンチ調査を基準とし、中心から東側・西側と順次に重機を使って表土を剥ぎ取り、本格的な調査に入った。

調査区の設定は、トレンチ十字点に基本ぐいを打ち、この点を中心として南北に5m、東西に10m間隔のグリットを組み、このぐいを基準とした。

なお調査地を鮮明に公表するため、十字線によって区分し、北東部をA区・南東部をB区・北西部をC区・南西部をD区と調査区の設定を行い、B・A・D・Cと順次に遺構の検出を実施した。

調査地はまた、農機トレンチャーによって縦横斜線と複雑に地表下約1m程も掘り込み、切り通された人搅乱地であって、遺構は寸断され、遺物は小片となって散乱し、遺構の検出には難を喫した。

調査の結果は、住居跡1基、中近世土坑16基、溝状遺構3条、柱穴264個が検出された。この中で、昨年度調査地からは検出されなかった住居跡が確認されたことは、この地域周辺にも、古代の住居跡が埋蔵されることを示すものであり、都於郡地域に於ける貴重な資料となった。

調査では、遺構検出に伴なって土師器を主とする遺物も1,394点出土している。しかし、これらの

遺物は、農機によって小さく碎かれた小片であり、遺構に密着した遺物も僅小で流入のものが多かった。また、調査地全域から出土した遺物も同様である。

(諸方吉信)

IV. 遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 遺構

縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代早期～晚期の遺物が出土しており、遺構の存在が推定される。

(2) 遺物(第7図)

縄文土器(第7図～18)

出土点数は790点を数える。1次調査と同様後期～晚期にかけてのものが多いが、量的には少なく、文様が施されているものも限られている。

1～8は塞ノ神式土器であるが、この塞ノ神式土器については1次調査の報告書において、口縁部と胴部に施されている文様によって5つに分類している。

I類 口縁部に幾何学的な沈線と刺突を施すもの

II類 口縁部に棒状のもので2列単位で刺突を施すもの

III類 口縁部は無文で、頭部に4条の平行沈線を施し、その上からジグザグ状に2本の沈線を施すもの

IV類 胴部に2条の平行沈線と無文帯を挟んだ縦位の燃糸を施すもの

V類 平行する沈線内に燃糸を施すもの

以上の5つに分類し、I類をいわゆる平柄式土器、II・III類を塞ノ神B式、IV類を塞ノ神A式a、V類を塞ノ神A式bとしている。

この中に、本調査出土の塞ノ神式土器をあてはめると、1がI類、4がIII類?、5、6がII類、7がIV類、8がV類に相当する。

その他、2の縦位に2列の燃糸とその両サイドに斜位の燃糸を施すもの、3の口縁上部に刻目口縁部にジグザグ状?の浅い沈線を施すものは、1次調査においては見当たらない。2は平柄式土器の胴部、3は塞ノ神B式と思われる。

9は縦位と横位の組み合わせて幾何学的に施した曾畠式土器で、胎土は微砂粒を含み、橙色を呈している。

10、11は上底で、内面が貝殻条痕で調整された深鉢の底部である。胎土は微砂粒を含み、黄橙色を呈している。後期の土器の底部と推定される。

12～14は精製浅鉢型土器の口縁部で、12、13の口縁部には1条の細い凹線が施されている。いずれも丁寧なヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、黒色あるいは黒褐色を呈している。15は精製浅鉢型土器の胴部で、内面のみヘラ磨きが施され、胎土は微砂粒を含み、浅黄橙色を呈している。16は組

表 1 細文土器観察表

図面番号	遺物番号	器種	部位	文様及び調査		焼成	色調		胎土	備考
				外面	内面		外面	内面		
第7図	1	浅鉢	頸部	比類と刺文の組み合わせ	ヨコナデ	良好	CPH86 10YR6/4	灰青褐色 10YR6/2	2mm前後の 砂粒を含む	住居址出土
"	2	"	胴部	縦位及び斜位の帶状文	ヨコナデ	"	CPH86 10YR6/4	灰青褐色 10YR6/2	"	"
"	3	"	口縁部	口縁端に刺目文 ジグザク状の比類	ナデ	"	橙色 5YR6/6	CPH86 10YR6/4	"	白雲母混入
"	4	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	"	橙色 7.5YR7/6	灰褐色 7.5YR7/2	"	P 3 出土
"	5	"	"	棒状のものによる 連続刺文	ヨコナデ	"	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	"	3号溝状遺構出土
"	6	"	"	数種起立帶に連続 刺目文	ヨコナデ	"	橙色 7.5YR6/6	灰褐色 7.5YR4/2	"	住居址出土
"	7	"	胴部	3条の平行比類文 縦位の組合文	ヨコナデ	"	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR7/6	"	"
"	8	"	"	比類内に組合文	ナデ	"	橙色 7.5YR1/6	橙色 7.5YR7/6	"	3号溝状遺構出土
"	9	"	"	縦位と横位の短比 類文	ナデ	"	橙色 7.5YR7/6	CPH86 10YR7/4	"	P 4.5 出土
"	10	"	底部	ヨコナデ	貝殻条痕	"	橙色 7.5YR7/6	灰褐色 2.5Y7/2	"	P 1.1.2 出土
"	11	"	"	ヨコナデ	貝殻条痕	"	明黄褐色 10YR7/6	褐灰色 10Y4/11	"	2号溝状遺構出土
"	12	浅鉢	口縁部	ヘラ磨き 1条の比類	ヘラ磨き	"	赤褐色 2.5YR4/1	赤褐色 2.5YR4/1	"	黒色磨研土器 P 3.1 出土
"	13	"	"	ヘラ磨き 1条の比類	ヘラ磨き	"	黒色 2.5Y2/1	黒褐色 2.5Y2/1	"	"
"	14	"	"	ヘラ磨き	ヘラ磨き	"	黒褐色 2.5Y3/1	黒褐色 2.5Y3/1	"	住居址出土
"	15	"	"	ヨコナデ	ヘラ磨き	"	CPH86 10YR7/4	淡褐色 2.5Y7/4	"	
"	16	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	"	暗灰褐色 10YR5/2	暗灰褐色 10YR5/2	"	住居址出土
"	17	"	胴部	ヨコナデ	ヨコナデ	"	褐灰色 10YR4/1	CPH86 10YR5/3	"	
"	18	"	"	ヨコナデ	ヨコナデ	"	淡黄色 2.5Y7/4	淡黄色 2.5Y7/4	"	

製浅鉢型土器の口縁部、17、18は胸部である。胎土は微砂粒を含み、黒褐色及び明黄褐色を呈している。

12～18は晩期前半に比定される土器群である。

石 器（第10図）

石 斧（第10図72）

第3トレンチから磨製石斧が1点出土している。現存長9.8cm、現存中央幅4.0cm、最大厚3.4cmを計る。頁岩製である。

敲 石（すり石）（第10図76～78）

各所から4点が出土している。76は最大長10.4cm・最大幅9.3cm・最大厚5.1cm、77は最大長12.5cm・最大幅9.2cm・最大厚5.2cm、78は最大長9.6cm・最大幅8.9cm・最大厚5.7cmを計る。安山岩系の石を使用している。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺 構

縄文時代と同様弥生時代の遺構は検出されなかつたが、弥生土器が出土しており、遺構の存在が推定される。

(2) 遺 物（第7図）

弥生土器（第7図19～23）

遺物総数の1%にも満たない12点が出土している。ほとんどが小片である。

19は甌型あるいは深鉢土器の底部で、底部径5.7cmを計る。表面は風化が進み、胎土はわりとあらく、橙色を呈している。20～23は甌型あるいは深鉢土器の胸部で、胎土はわりとあらく、浅黄橙色を呈している。

石 器（第10図）

石 斧（第10図71）

有肩打製石斧の柄部と思われる破片が住居址から1点出土している。71は現存長6.3cm、最大幅4.4cm、厚さ1.5cmを計る頁岩製のものである。抉入は浅い。

3. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 遺 構（第3図～第6図）

調査対象地の中央から南側を中心に、方形状土坑14基・円形状土坑2基・住居址1軒・溝状遺構3条・柱穴262個を検出している。1次調査においては、方形状土坑17基・円形状土坑2基・土壙1基・柱穴329個が検出されており、わずか3,000m²内にこれだけの遺構が点在しており、何回となく同場所で生活が営まれておりより複雜な遺構群となっている。

方形状土坑（第4図・第5図）

方形プラン7基と長方形プラン7基の計14基を検出している。

1号土坑は、調査地の南部で、長軸0.75m・短軸0.55m・深さ0.45mの長方形プランを呈している。底面は、長軸0.4m・短軸0.27mを計る。遺物は、出土していない。

2号土坑は、1号土坑の5m北西、長軸0.76m・短軸0.72m・深さ0.5mの方形プランを呈している。底面は、長軸0.61m・短軸0.5mを計る。遺物は、出土していない。

3号土坑は、2号土坑の南に近接して、長軸1.15m・短軸0.7m・深さ0.67mの長方形プランを呈している。底面は、長軸0.78m・短軸0.45mを計り、ゆるやかな凹レンズ状を呈している。遺物は、土師器2点・白磁1点・青磁1点が出土している。

4号土坑は、3号土坑の5m南西、長軸1.45m・短軸0.98m・深さ0.35mの浅い長方形プランを呈している。底面は、長軸1.33m・短軸0.77mを計る。遺物は、出土していない。

5号土坑は、調査地のほぼ中央部、長軸1.66m・短軸0.9m・深さ1.3mの長方形プランを呈している。底面は長軸1.65m・短軸0.74m、底面から直上ぎみに壁面が立ち上がっている。遺物は、土師器・陶器(40)が出土している。

6号土坑は、調査地の南中央部、長軸0.8m・短軸0.63m・深さ0.2mの浅い長方形プランを呈している。底面は、長軸0.67m・短軸0.5mを計る。遺物は、出土していない。

7号土坑は、6号土坑の北3.5m、長軸0.92m・短軸0.49m・深さは底面が2段になっており、深いほうが0.4m・浅いほうが0.27mを計る。

8号土坑は、中央部、長軸0.92m・短軸0.94m・深さ2.45mの深い方形プランを呈している。底面は、長軸0.92m・短軸0.9mを計る。底面から直上ぎみに壁面が立ち上っている。遺物は土師器16点・陶器2点・青磁8点(44~46)が出土している。

9号土坑は、8号土坑の4m西、長軸0.75m・短軸0.74m・深さ0.52mの方形プランを呈している。底面は、長軸0.65m・短軸0.6mを計る。遺物は、縄文土器1点・土師器11点・陶器1点が出土している。

10号土坑は、調査地の西方、長軸0.9m・短軸0.69m・深さ3.5mの長方形プランを呈している。底面は、長軸0.67m・短軸0.55mを計り、壁面は、底面から直上ぎみに立ち上っている。遺物は、縄文土器1点・土師器44点・陶器2点・青磁2点・青磁2点・金属器1点(67)が出土している。

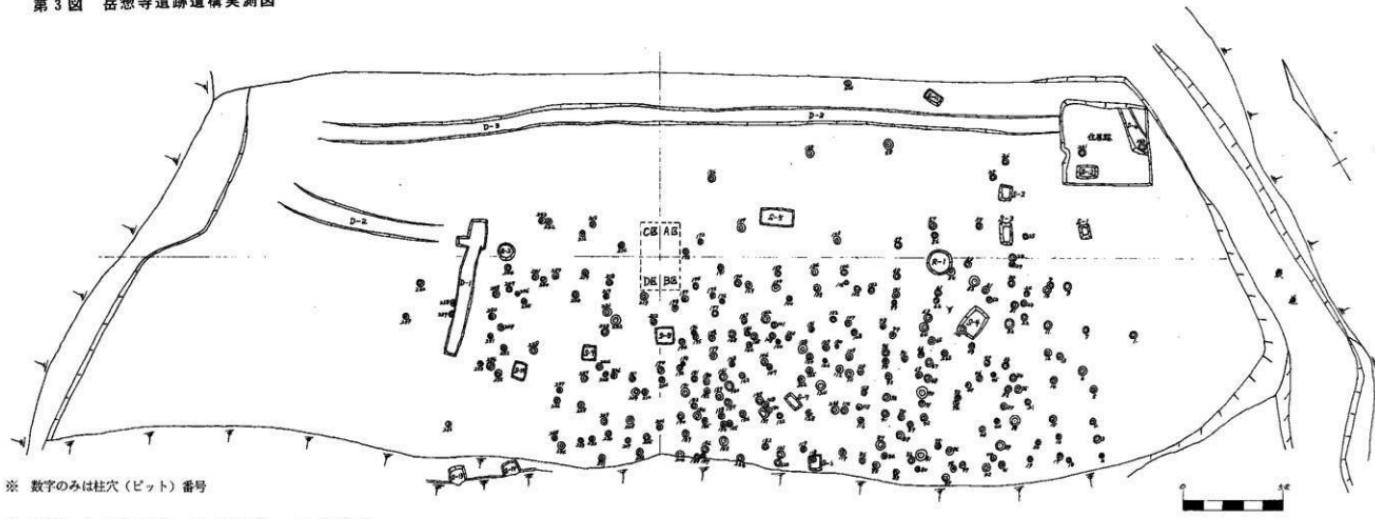
11号土坑は、調査地の最北部、長軸0.89m・短軸0.54m・深さ0.48mの長方形プランを呈している。底面は、長軸0.7m・短軸0.45mを計る。遺物は、出土していない。

12号土坑は、調査地の東方、住居址内にあり、長軸0.97m・短軸0.74m・深さ0.37mを計る。底面は、長軸0.72m・短軸0.47mを計る。遺物は土師器8点が出土している。

13号土坑は、調査地の西端、土採取によって南側の一部が欠損している。現存長軸0.95m・短軸0.8m・深さ3.7mの長方形プランを呈している。底面は、現存長軸0.75m・短軸0.7mを計り、壁面は、底面から直上ぎみに立ち上っている。遺物は、土師器1点・陶器2点(37)が出土している。

14号土坑は、13号土坑の東3m、同様南側の一部が欠損している。現存長軸0.73m・短軸0.72m・

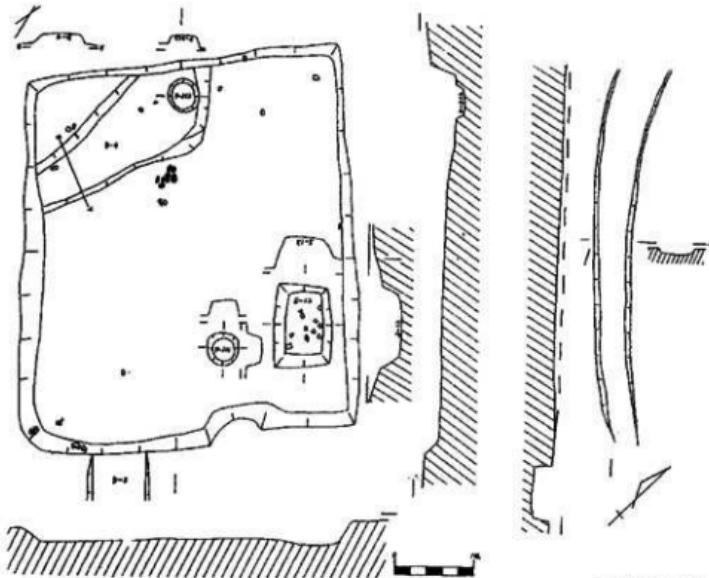
第3図 岳惣寺遺跡遺構実測図



※ 数字のみは柱穴（ピット）番号

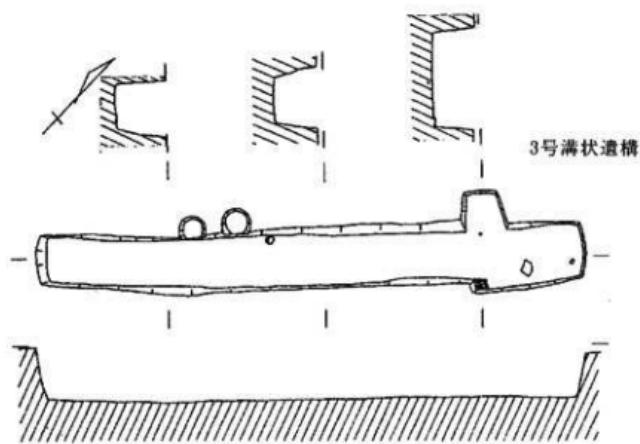
※ 略記号 S-方形状土坑 R-円形土坑 D-溝状遺構

第3図 造構分布図



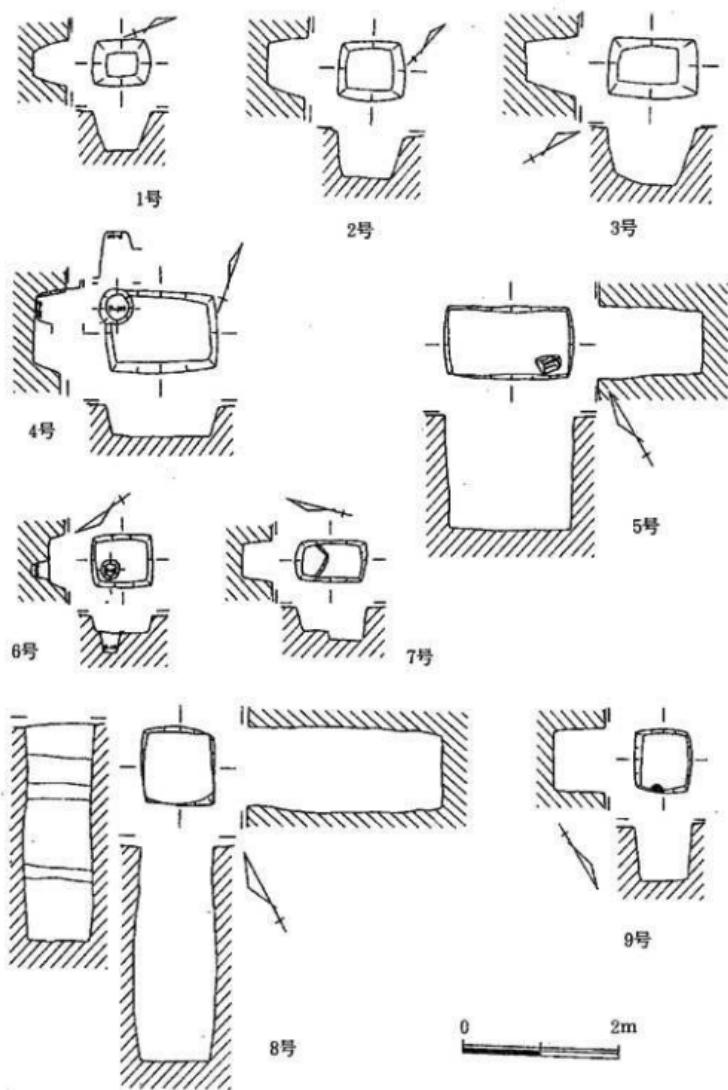
2号溝状遺構

住居址

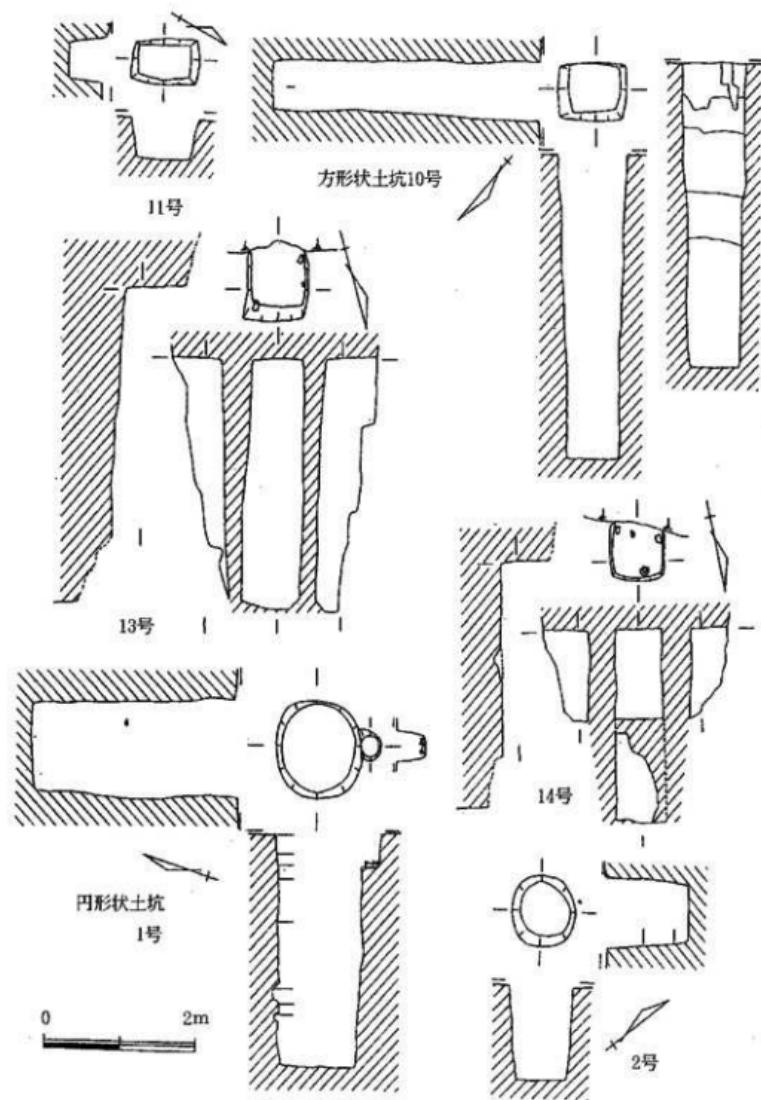


3号溝状遺構

第4図 住居址・溝状遺構(2・3号)実測図



第5図 方形状土坑（1号～9号）実測図



第6図 方形状土坑（10～14号）・円形状土坑（1・2号）実測図

深さ 2.7m の方形プランと推定される。底面は現存長軸 0.66m・短軸 0.63m を計り、壁面は、底面から直上ぎみに立ち上がっている。遺物は、土師器 1 点・陶器 1 点・青磁 1 点 (43)・石器 1 点が出土している。

円形状土坑（第 5 図）

調査地の中央部に 1 基と東方に 1 基の計 2 基検出している。

1 号土坑は、調査地の中央部、径 1.15m・深さ 2.65m、底面径 1.04m を計る。遺物は、縄文土器 2 点・弥生土器 1 点・土師器 49 点・白磁 1 点・青磁 1 点・鉄さい 1 点・炉口石片 1 点等が出土している。

2 号土坑は、調査地の東方、径 0.8m・深さ 1.1m、底面径 0.6m を計る。遺物は土師器 15 点が出土している。

住居址（第 6 図）

調査地の北東端、方形プランの竪穴式住居址で、長軸 4.55m・短軸 4.15m の規模を有している。壁面は約 45 度の角度で立ち上がり、壁高は北で 20cm・南で 30cm を計る。西側壁面は 3 号溝状遺構と接合し、住居址内には 12 号方形状土坑が存在する。

また、住居址内東西には本住居址の柱穴と思われるビットが配されている。

遺物は、縄文土器 77 点 (1~3・6・7・14・16)・弥生土器 2 点 (20)・土師器 45 点・陶器 4 点・青磁 5 点・染付 3 点・土錐 1 点 (53)・石斧 1 点 (71) 等が出土している。

溝状遺構（第 6 図）

1 号溝状遺構は、調査地の北部を東西にはじめている。同遺構の東端は住居址と接合している。長さ 36.5m・幅 0.8~1.1m・深さ 0.05~0.1m を計る。遺物は、縄文土器 5 点・土師器 89 点 (25・27)・陶器 6 点・青磁 4 点・染付 1 点・石錐 1 点 (62) 等が出土している。

2 号溝状遺構は、調査地の西方に位置している。長さ 8.0m・幅 0.9~1.3m・深さ 0.06~0.08m を計る。遺物は、縄文土器 5 点 (11)・土師器 6 点・陶器 2 点が出土している。

3 号溝状遺構は、調査地の西方に位置している。長さ 7.0m・幅 0.7・深さ 0.6~0.65m を計る。北部は西に 0.35m 程突出している。遺物は、縄文土器 6 点 (5~8)・土師器 2 点・陶器 4 点・白磁 2 点 (41)・青磁 7 点・染付 5 点 (51) 等が出土している。

この溝状遺構の機能及び、使用目的については不明である。

柱穴（第 3 図）

調査地の中央部から東方にかけて 262 個検出している。形は方形柱穴 1 個、その他は円形柱穴である。規模は上縁径 20~63cm・深さ 6~65cm を計り、変化に富んでいる。埋土は、黒色土が多いが、中には、灰白色の粘土を含んだものもある。

これら柱穴の検出については、岳惣寺関係を含めた掘立柱建物の手掛りを求めるが、あまりにも集中しており、掘立柱建物を規模等を確認するには至らなかった。

これだけの柱穴を検出したことは、何回となく同場所に掘立柱建物が建てられたことを表しており、より複雑な柱穴群となっている。

遺物は、縄文土器89点（4.9・10・12）・弥生土器8点（19・21・22）・土師器327点（24・26・29・30～32）・瓦器2点（35・36）・陶器20点（38）・白磁2点（42）・青磁31点（45）・染付7点（48・49・52）・土錐4点（54～57）・石錐7点（59～61・63～66）・すり石1点（77）・金属器6点・古銭2点（74）等が出土している。

（2）遺物

土師器（第8図24～34）

出土点数 870点で全体の63%を占める。その3分の1が土坑、3分の1が柱穴、その他溝状遺構に伴って出土している。器形は壺かほとんどで、底部焼目がはっきりしているものや丸みをおびてはっきりしないもの、ヘラ切り底のものや糸切り底のもの等バラエティーに富んでいる。これらは、時期的・時代的な変化であると考察される。

24は口縁推定径13.5cm・底部径 7.6cm・器高 3.0cmを計る。底部端がわずかには張り出し、底部から直線的に口縁部に至っている。胎土は微砂粒を含む、橙色を呈している。調整はヨコナデ、ヘラ切り底を有している。25は口縁推定径13.5cm・底部径 7.3cm・器高 3.0cmを計る。底部端はわずかに張り出し、底部から内湾ぎみに口縁部に至っている。胎土は微砂粒を含み、浅橙黄色を呈している。調整はヨコナデ、ヘラ切り底を有している。26は口縁推定径13.4cm・底部径 7.6cm・器高 3.0cmを計る。

底部端は張り出し、底部から内湾ぎみに口縁部に至っている。胎土は微砂粒を含み、浅橙黄色を呈している。調整はヨコナデ、ヘラ切り底を有している。

27は底部径 8.5cm・器高 2.2cm、明褐色を呈し、28は器高 2.9cm、橙色を呈し、29は器高 2.4cm、浅橙黄色を呈し、30は口縁推定径 8.2cm・底部径 5.5cm・器高 1.6cm、橙色を呈した壺である。いずれも胎土は微砂粒を含み、調整はヨコナデ、ヘラ切り底を有している。

31・32は糸切り底を有した壺の底部である。31は底部径 6.3cmで、底部端が張り出している。胎土は微砂粒を含み、ヨコナデ調整で、浅橙黄色を呈している。33は底部推定径 5.5cm、胎土は微砂粒を含み、ヨコナデ調整で、浅橙黄色を呈している。

33は口縁部に低い突帯を有した、34は口縁部が「く」字状に外反した壺型土器あるいは深鉢土器の口縁部である。胎土は微砂粒を含み、ヨコナデ調整で、浅橙黄色を呈している。

瓦器（第8図35・36）

わずかに2点出土している。35は外面に突帯を有した深鉢型土器、36は外面の横位の沈線とヘラ状のもので縦位に連続刺突を施し山形状の文様を施した深鉢型土器の胴部である。35は黒褐色、36は橙色を呈している。

陶器（第8図37～40）

全体の5%にあたる66点が出土している。37は横位に平行と波状の沈線を施した軸付の壺型土器、38・39は無文の壺型土器の胴部である。37は赤灰色、38は暗赤灰色、39は灰褐色を呈している。40は擂鉢で、暗赤灰色を呈している。

白磁（第9図41・42）

わずか7点出土している。いずれも小片である。41・42は高台付小鉢の底部である。41は高台の高さ 0.7cm、42は高台径 3.0cmを計る。

青 磁 (第9図43~47)

柱穴を中心比較的多く、74点が出土している。43は14号土坑から出土した高台付碗で、唯一、口縁部から底部まで復元できる資料である。口縁推定径11.7cm・高台径 5.0cm・高台の高さ 1.2cm・器高 7.0cmを計る。高台から内湾ぎみに立ち上がって口縁に至り、灰オリーブ色を呈している。44は鉢型土器の口縁部で、やや外反している。口唇部は波状で、明緑灰色を呈している。45は高台付碗の底部で、高台径 5.4cm・高台の高さ 1.2cmを計る。オリーブ色を呈している。46・47は鉢型土器の底部で、44と同一個体と思われる。高台の高さ 1.0cmを計る。

集 付 (第9図48~52)

22点が出土している。唐草文や草花文等が描かれている。48・49は碗(小鉢?)の口縁部で、器厚は薄く、口唇部は丸みをもっている。50・52は碗(小鉢?)の胴部で、器厚は薄い。51は碗(小鉢?)で、高台から強く内湾して胴部に至る。

土 鍾 (第9図53~57)

柱穴内から4点と住居址内から1点の計5点出土している。最大長 3.8~5.5cm・最大幅 1.5cm前後を計る。

各部の計測の詳細については表2に記載したので、ここでは省略する。

石 鍾 (第9図58~66)

柱穴を中心9点が出土している。最大長 2.0~4.2cm・最大幅 0.5~1.1cmを計る。

各部の計測の詳細については表2に記載したので、ここでは省略する。

表2 土鍾・石鍾測定表

単位: cm

図面番号	遺物番号	器種	最大長	最大幅	内径	出土遺構	備考
第9図	53	土鍾	5.4	1.4	0.4	住居址	
*	54	*	3.9	1.4	0.4	P51	
*	55	*	3.9	1.5	0.4	P68	
*	56	*	3.8	1.5	0.3	P20	
*	57	*	4.4	1.5	0.4	P60	
*	58	石鍾	4.1	1.0	0.4		
*	59	*	2.5+a	1.1	0.4	P236	一部欠損
*	60	*	2.5+a	0.9	0.15	P210	*
*	61	*	3.5+a	0.8	0.2	P250	*
*	62	*	2.7+a	1.0	0.3	L号環状遺構	*
*	63	*	3.1+a	0.7	0.2	P89	*
*	64	*	2.9+a	0.6	0.2	P250	*
*	65	*	2.8+a	0.5	0.25	P111	*
*	66	*	2.0+a	0.5	0.25	P98	*

金属器（第9図67～69）

柱穴内を中心に13点出土している。腐食著しく何であるか判断がつきにくいが、形からすると釘と思われる。67は長さ 6.5cm・断面方形を呈し、68は長さ 5.9cm・断面梢円形（方形？）を呈し、69は長さ 5.2cm・断面方形状を呈している。

炉 口（第9図70）

砂岩製の炉口石片で、現存長20cm・幅11cmを計る。中央に径 2.5cmの吹込み孔を有している。

古 錢（第10図74）

柱穴から2点出土しているが、いずれも腐食著しく、いつの時代のものか判断がつかない。

鉄さい（第10図73・74）

柱穴及び土坑から7点出土している。

（費 方 政 級）

V. ま と め

①

日高 正晴

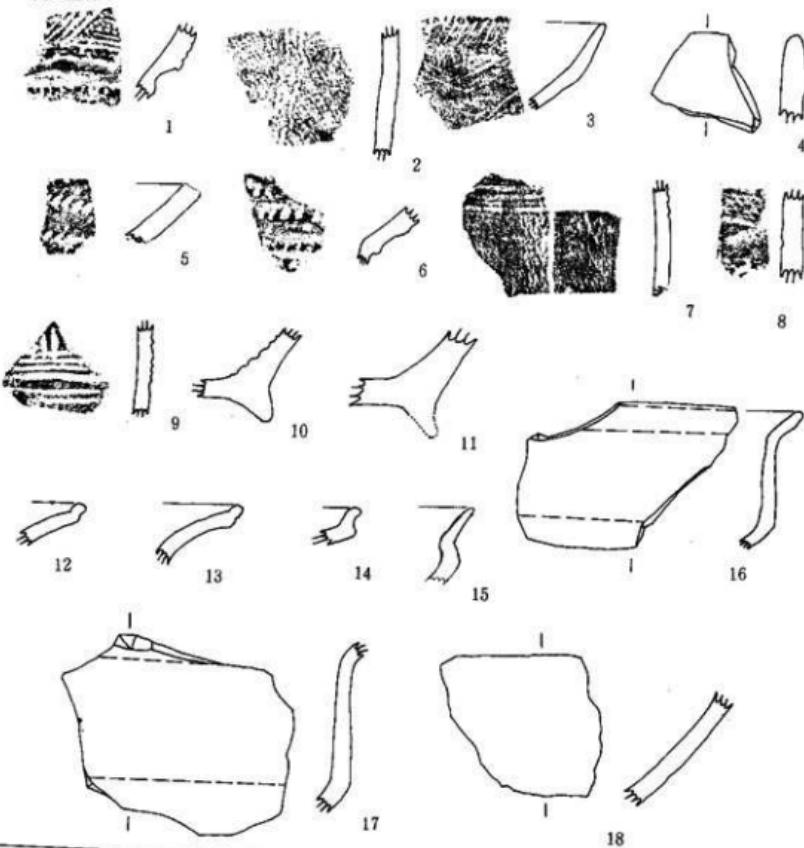
第一次の岳惣寺遺跡事前発掘調査が、昭和63年7月から9月にかけて行われたが、今回は、それに引き続く第2次発掘調査として、第1次調査地域に隣接する東側の1500m²の地区で発掘調査が実施された。中世期における山城としは、戦国時代、日向において中心的勢力を有していた伊東氏の居城として、これまで注目されてきたが、昭和62年7月、都於都城本丸跡の発掘調査から数えて3回目の郭の調査ということになる。さて、本遺跡の調査を進めて、確認された遺構としては、まず、極めて多数の柱穴状ピットが現われたことである。その数は 264ヶ所もあり、しかもそれが群在していたため、建築遺構としての間取り組合せも容易にできなかった。そのことは第一次の調査の時も同様であったが、反面、整然とした間取り柱によって建築されていなかったことは、この遺跡から当時の瓦が全く出土しなかったこととも相まって、その建築遺構の素朴さを表現しているようにも考えられた。それから、この岳惣寺遺跡に関しては、その主体をなすものが、伊東祐充の菩提寺跡であることと、この場所が都於郡本城防衛の郭的存在をなしていたと想定されるので、その遺構についても、そのような見地に立って考察すべきであると思う。そこで、想起されることは方形状土坑14ヶ所、円形状土坑2ヶ所の発見である。第1次岳惣寺遺跡調査の際も、調査地域1200m²の地域にはほぼ同数の方形および円形の土坑が確認されたことは、一旦緩急の場合の貯蔵施設ではないかと推測される。それから、興味深いのはこの遺跡から1ヶ所、住居址が発見されたことである。この住居址は4.55m×4.15m規模の方形プラン状竪穴式様式のものであり、深さも25cm～30cmを計られる比較的整然とした形式のものであったが、構築の時期としては、内部から出土した土器類から考察して古式土師器の年代頃に想定される。また、そのことと関連をもつものであるが、この住居址のすぐ西側付近だけに弥生終末期前後の上器片がかなり検出された。次に、この遺跡から出土した遺物について述べてみたい。前述したように、この遺跡が伊東氏時代に開拓の深いことに關してはふれたところであるが、そのことを裏

づけるかのように中世期の年代と推測される土師器質の土器が多量に出土している。さらに、都於郡城本丸および第1次岳惣寺遺跡の発掘調査においても発見された当時では極めて貴重な青磁、白磁類が検出された。そして、これらの磁器類が16世紀の前半頃に中国から輸入されたものであることについては、すでに論述したところであるが、ちょうど、その時期が都於郡伊東氏の最盛期でもあった。なお、関心をそそられることは、この岳惣寺遺跡があるような視界のきく台地上には必ずといってよいほど、縄文早期の土器が発見されるということである。本遺跡においても、塞ノ神式の早期縄文土器片が確認されたが、また同時に縄文後期から晩期にかけての土器片もかなり出土した。また、これまでに西都市内の遺跡発掘調査において、早期縄文土器が発見された遺跡は、ほとんど、この岳惣寺遺跡から眺望できる地点に存在している。すなわち、西の方約3.5kmの三財中ヶ原台地上にある中原遺跡は、この岳惣寺台地から指揮の間にあるが、ここからも縄文時代早期の土器がかなり発見された。ここでも塞ノ神式土器が最も多く、次いで梢円押型文土器および、山形押型文土器、それに貝殻條痕文系の前平式土器などが出土した。また、この中原遺跡の地は、岳惣寺遺跡も同様であったように、都於郡伊東氏にまつわる中原城址でもある。そして発掘調査の結果、土壘、空堀跡なども確認できて、中世の山城跡として存在が実証できた。このように中世の保塁的要地として、防衛にも適した岳惣寺遺跡は、また、原始時代においても、同様に防衛的立地条件に適合していたことになり、年代的に相当に離れているにかかわらず、両時代における拠点立地の目的が同じ意味をもっていたことは興味をおぼえるところである。一方、遙か東北に望まれる西都原古墳群台地上にも、縄文早期の遺跡が確認⁽³⁾されている。この台地ではこれまでに2ヶ所発見されているが、昭和32年5月に発掘調査された原口遺跡は、西都原台地南東突出部に所在しており、この遺跡でも、岳惣寺遺跡同様、縄文早期の貝殻縄⁽⁴⁾文系前平式土器が出土したが、さらに平成元年10月には、同じく西都原台地の最北突出部にある丸山遺跡の発掘調査において、縄文時代の前平式土器が発見され、縄文早期の遺跡が確認された。このように岳惣寺台地をはじめとして、眺望のきく西都市内および児湯地区の洪積層の台地上には縄文早期の遺跡が現れているが、さらにその下層には先土器時代の遺物層も認められるので、極めて古い時代から、この地方には人間が住みついていたことが理解できるのである。

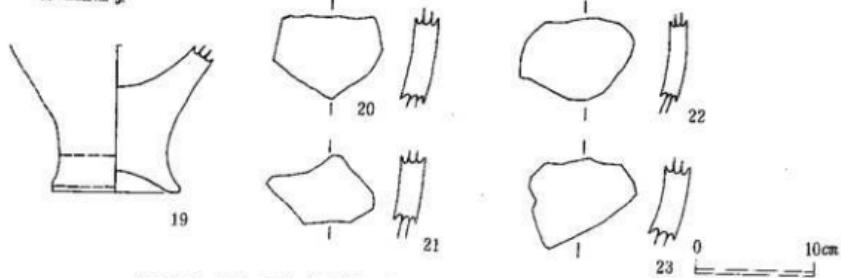
註

- (1) 西都市教育委員会『岳惣寺遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 1989年3月
- (2) 上に同じ『都於郡城本丸址』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 1988年3月
- (3) 西都市「原口遺跡」『西都の歴史』 1976年9月
- (4) 西都市教育委員会『丸山遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 1990年3月

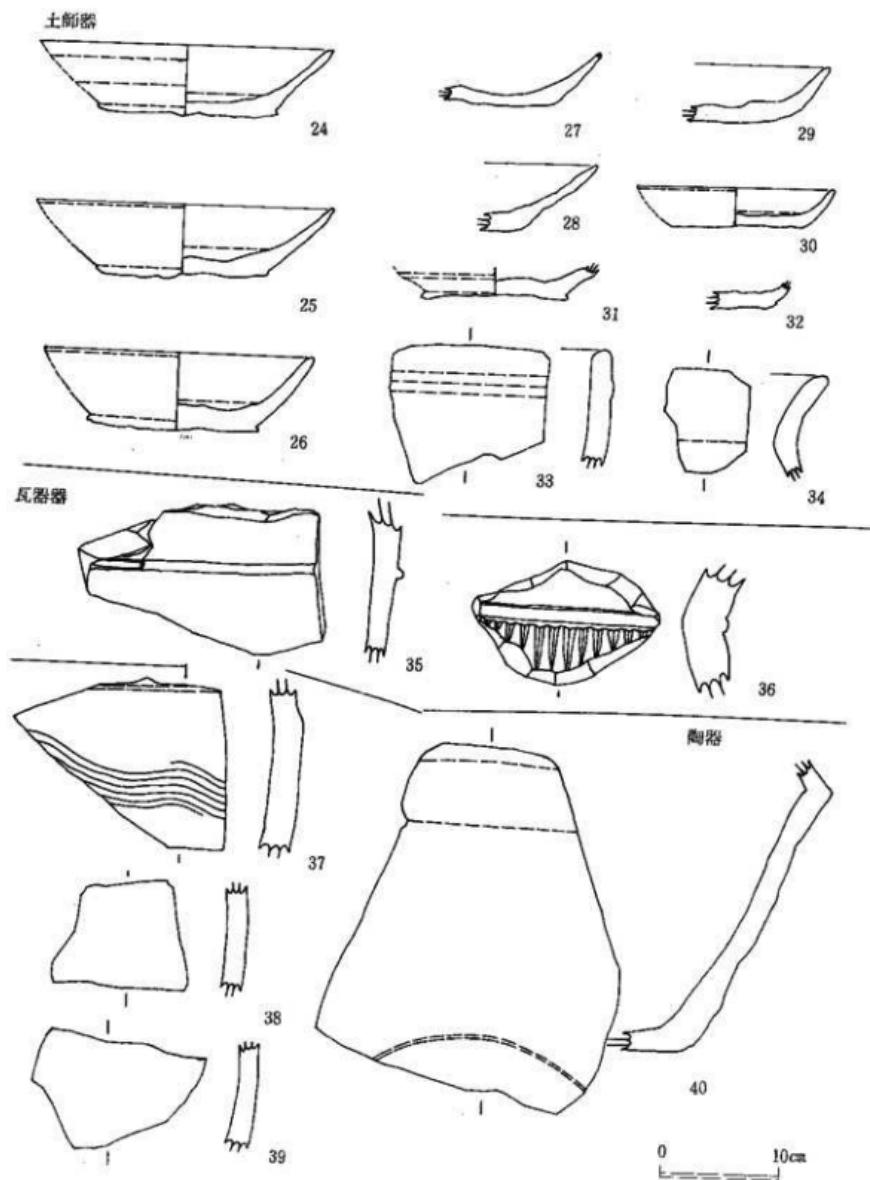
縄文土器



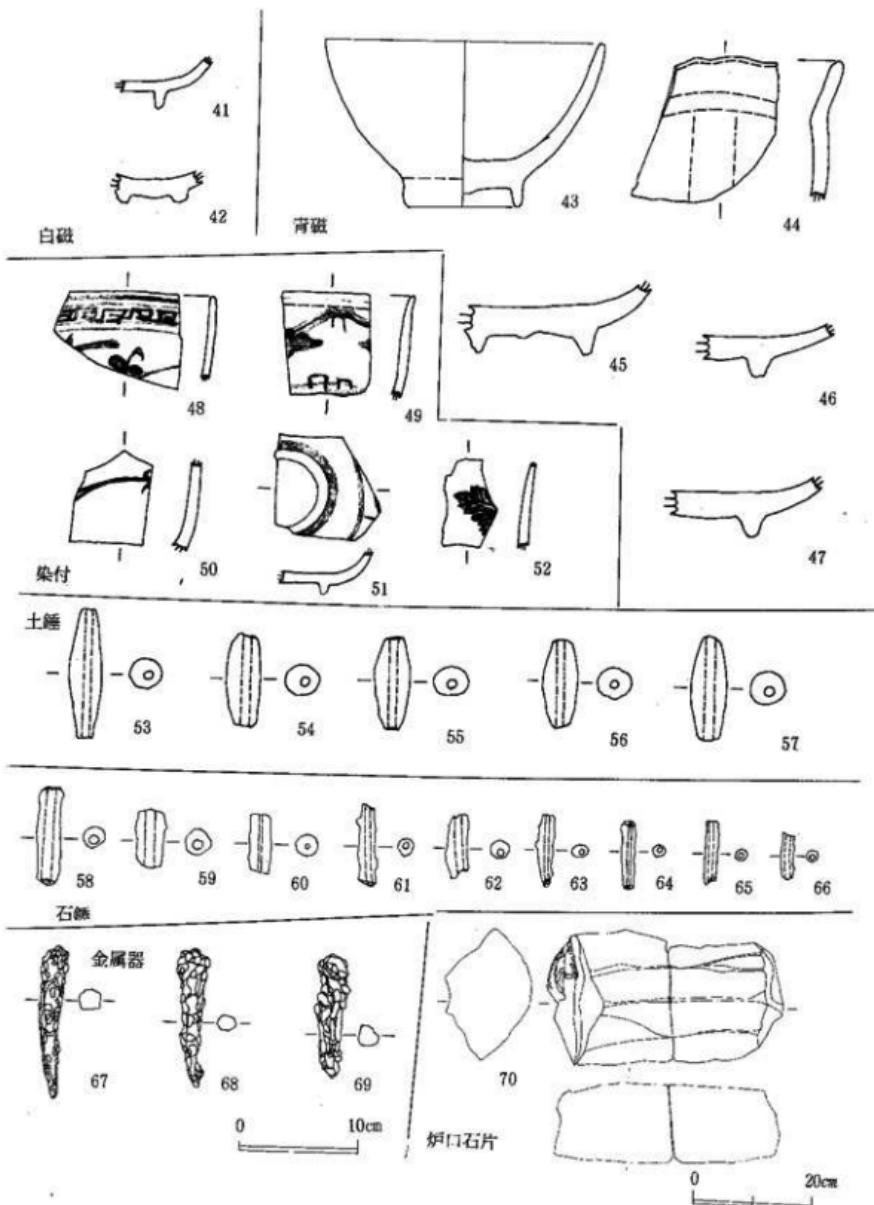
弥生土器



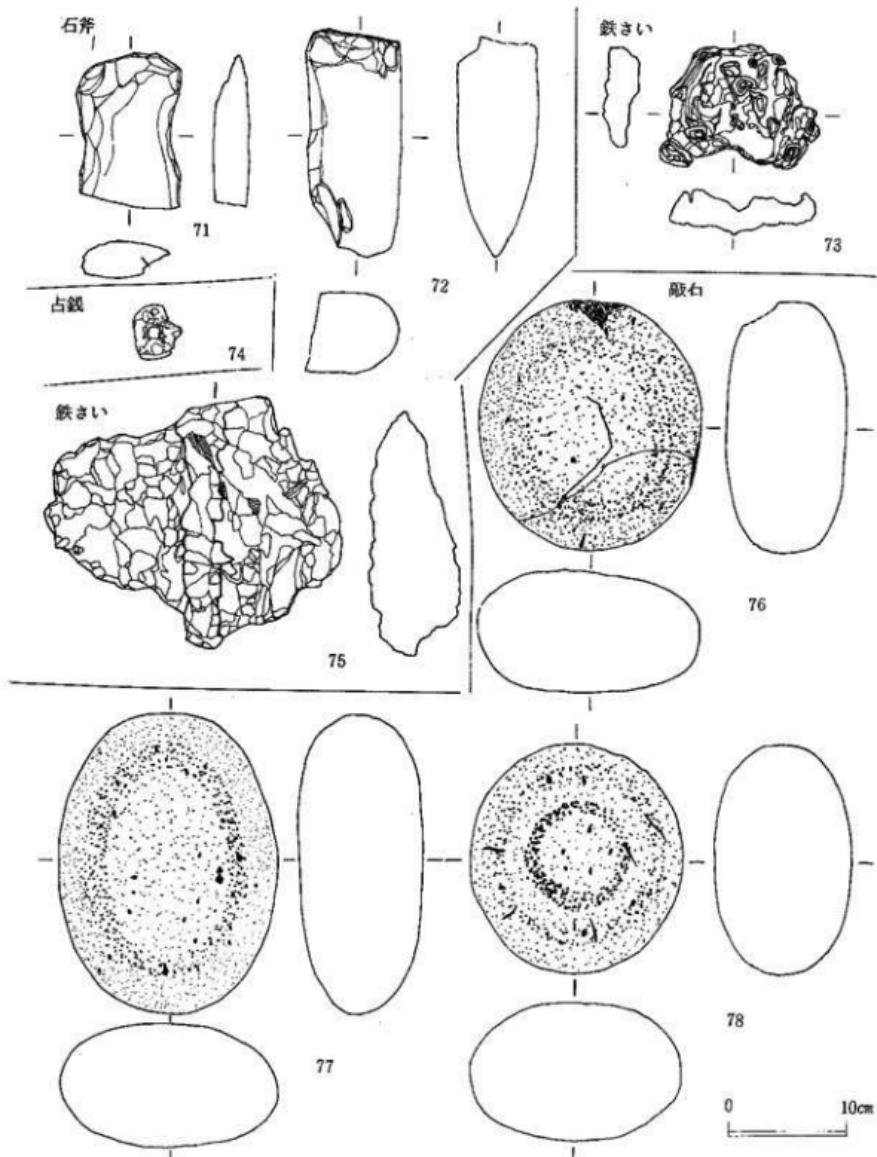
第7図 出土遺物実測図・拓影（縄文土器・弥生土器）



第8図 出土遺物実測図（土師器・瓦器・陶器）



第9図 出土遺物実測図（白磁・青磁・染付・土錘・石錘・金属器・炉口瓦片）



第10図 出土遺物実測図（石斧・古銭・鉄さい・敲石）

図 版

卷之三

卷之三



卷之三

卷之三



卷之三
卷之三



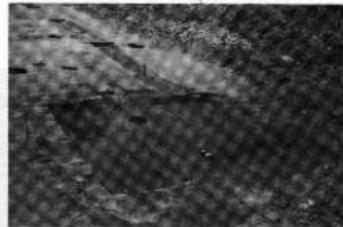
岳惣寺遺跡近景



遺構分布状況



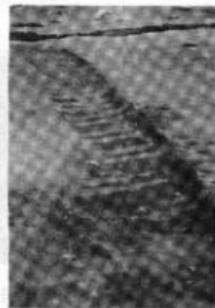
遺構分布状況



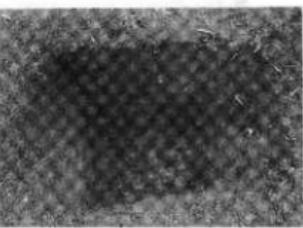
住居址検出状況



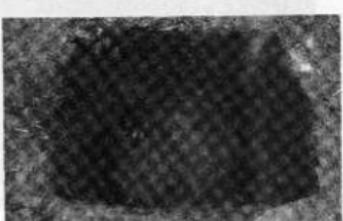
1号溝状遺構検出状況



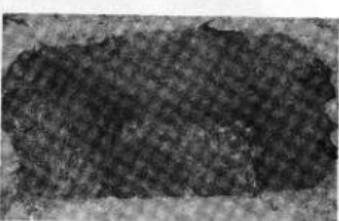
2号溝状遺構検出状況



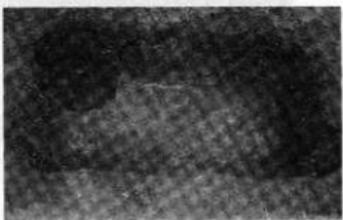
1号(方形状)土坑検出状況



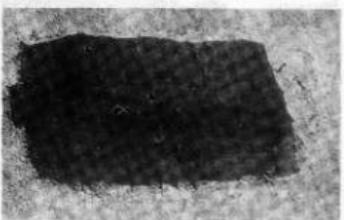
2号 土坑検出状況



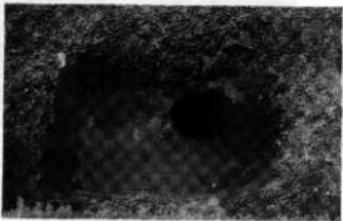
3号 土坑検出状況



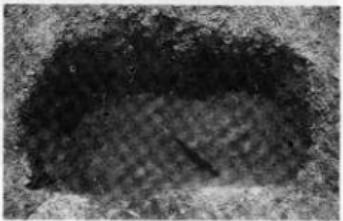
4号 土坑 檢出狀況



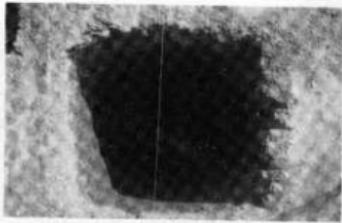
5号 土坑 檢出狀況



6号 土坑 檢出狀況



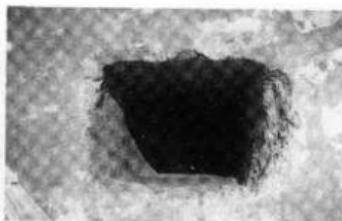
7号 土坑 檢出狀況



8号 土坑 檢出狀況



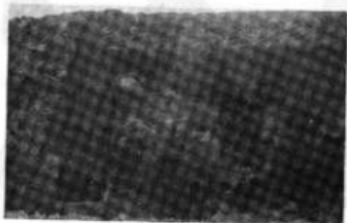
9号 土坑 檢出狀況



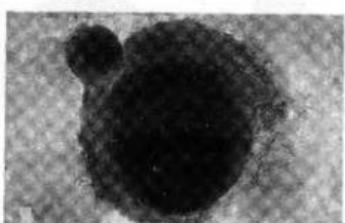
10号 土坑 檢出狀況



11号 土坑 檢出狀況



13・14 土坑検出状況



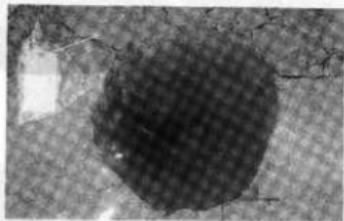
1号円形状土坑検出状況



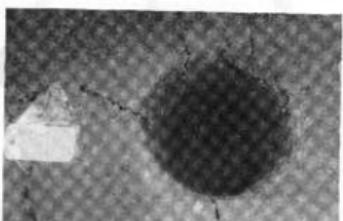
2号「丁」形状土坑検出状況



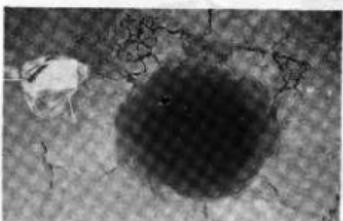
P 98 検出状況



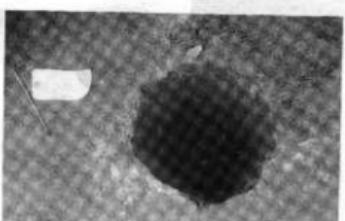
P 101 検出状況



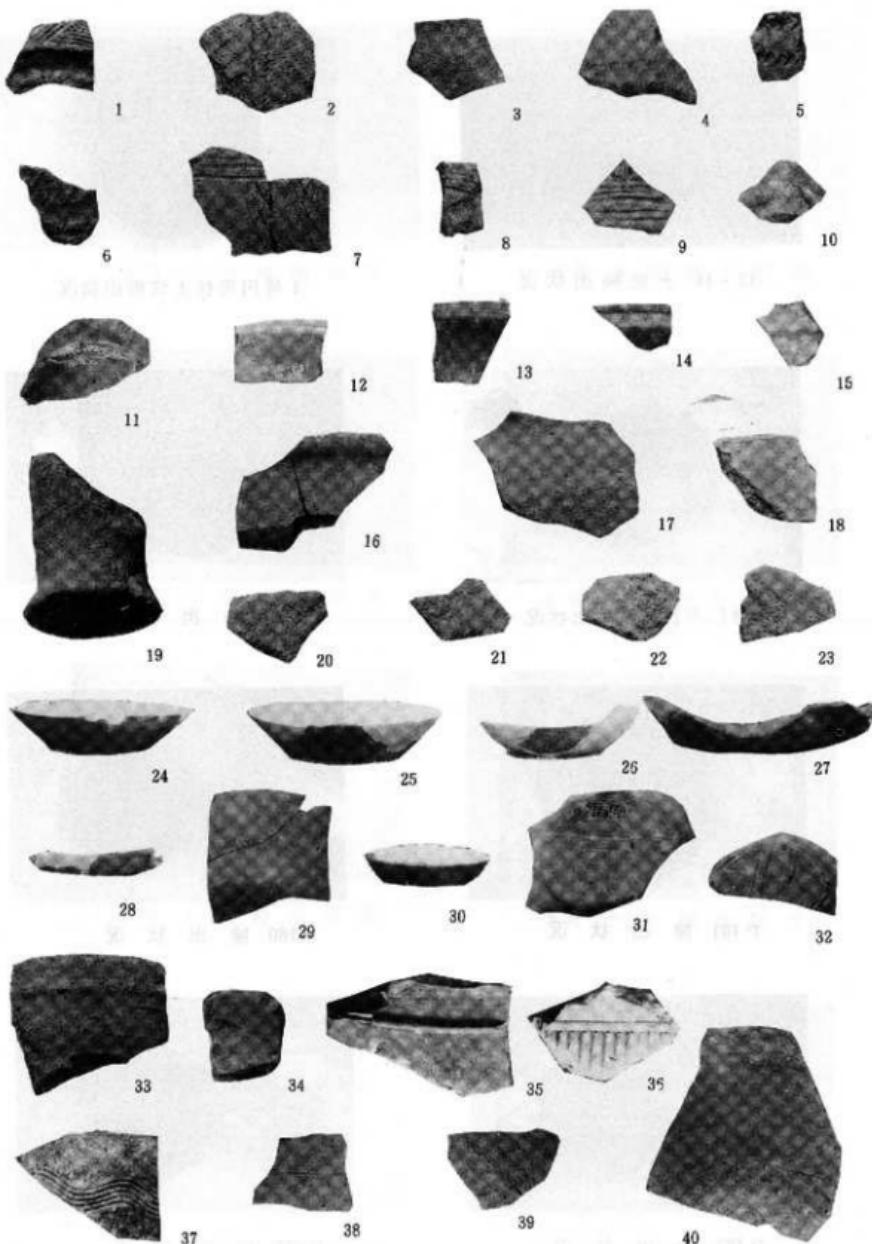
P 160 検出状況



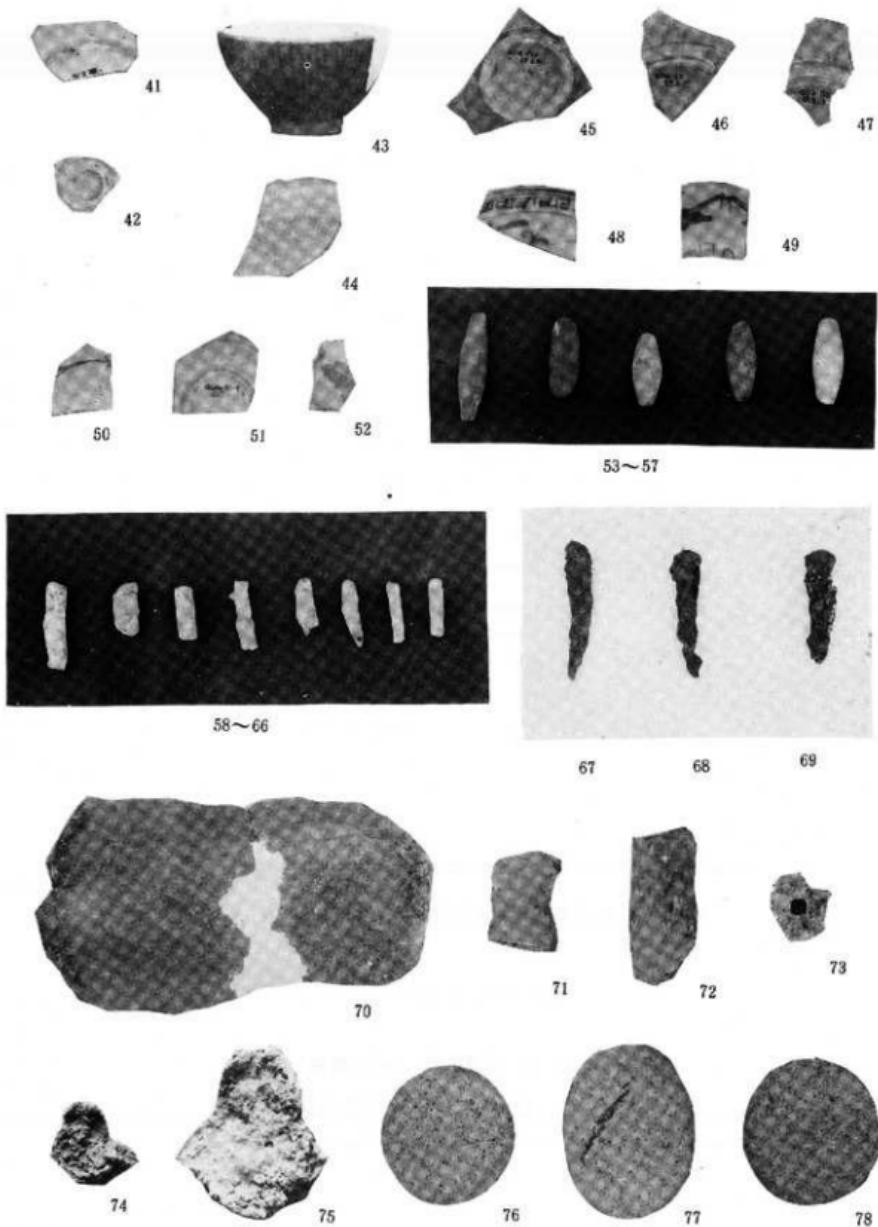
P 182 検出状況



P 216 検出状況



図版 5



西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集

平成3年3月30日発行

編集発行 西都市教育委員会
印刷所 (有)河野印刷所

